百出元より弟ゟ愚論貫通可仕とも存不申候得とも可成丈けは千載ゟ筆誅を不受樣に心付候處丈けは此際不相盡ゥは相濟間敷歟と存込成否は兎も角も職分丈けゟ處は相盡べくと奉存候

御東幸前も右ゟ次第故諸方より歎願書其外要件ゟ書差出し候もの机上に充滿遷延ゟ爲に旅宿に數十日空敷滯留種々ゟ怨訴も有之蒙命候事に付

御東幸前に一々片付議參へも一應及議異論無之分丈けは其運に致し置申候名和緩なども岩卿に居候に付凡其樣子は承知仕居候歟とも存申候弟も亦爲國家人ゟ怨を半引受け候も男子ゟ一愉快と存有之儘に盡し申候敢ゥ喋々此余は不申上只々御安堵被下候爲めに一應申上候余今日決ゥ功名に心なく是も亦喋々不申上是また不幸にして幾十ゟ友人難に斃れ弟など僥倖にして今日ゟ

盛時に遭遇し亡友ゟ誠心を不顧ゥは不相濟と只存込居申候其譯は我長州ゟ如きは今日尋常諸侯一樣ゟ勤王と思ひを同し候ゥも不相盡と奉存候此今日ゟ深意を解候仁々は皆黃泉ゟ客となり今日相殘り居候ものも只々御國難を凌き候事而已に心をこめ今日の勢に至り齟齬仕候事有之候ゥは不相濟事歟不盡處も有之候事と存申候然る處我藩ゟ任は始終ゟ處尤肝要歟と奉存候其主意は初發御周旋ゟ思食

皇國を御維持被爲遊

皇威を御更張被爲在度との御事にゥ只々幕府のかばちを打擊候と而已ゟ事にゥ無之前途ゟ御所致により

大政一新も眞ゟ

大政一新と申ものにゥは無之樣可相成歟と奉存候海外各國にゥは大に今日ゟ政府を不信ものありまた今日ゟ諸侯を不信ものあり其は何となく形ゟ上に顯れ候處を察し候ゥより起り候事と被思申候是は神交

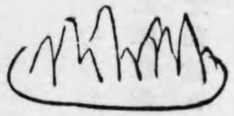
老兄に而已申上候故御含被下尙御高見も被爲在候は御存分に御示敎奉願

候其譯は

皇國御維持は此行末千載に誓ひ一致一定外に當り候外は無之と奉存候た

とへば今日まで

皇國之形勢



如右にゐ各々自分之山を高くいたし度と之了簡にゐ

皇國一致と申處元より無覺束隨ゐ氣脉等も各々と相成天下之一力を以外

に當り候處始終六つヶ敷依ゐ

皇國如此之體と相成

朝廷之御基本に奉基各々順々に肩をなし一體一力を以共に

皇國を維持仕候ときは五洲强大何そ終に恐るゝに足んと存候一念に御座

候誠に以機易去難來今日より惡るぐせが出來候と必

大政一新も名而已に成果可申歟と深く苦心仕候

皇國之御維持不相成事に御座候得は

大政一新も幕政も同樣にゐ五十步百步歟と奉存候弟別に功名之心なし月

給は十分に頂戴仕廣澤翁などにも申合半は返上仕度と存込內密申立戰爭

中は被減候御運にも至り難有奉存候位に付賄賂はまだ取り不申候是又御安心可被下候いかにも

老兄ゟ他人視不被下處幾應にも不堪感謝候に付只管爲御安心と例ゟ長文相認め申候已來尙又十分に無御容赦御示諭御高敎奉願候豐石ゟ地などに付候ゟも世上狼籍千萬ゟ說有之候由中には弟がおさへて二州を朝廷へ不出などの說も有之趣相告け吳候ものも有之申候是又甘し居申候先は右申上度匆々頓首拜

十五夜

尙々來春は弟も御暇を相願度存居申候其までには拜靑可仕候○邪蘇一條實に世間ゟ疑說是又御安意可被成候乍去他日終に各國と爭端を起し候は必此一事に無疑と存申候十に九如見覺申候拜

宇宙（宇宙は野村素介なり）　樣御內拆

準一

（此書月日を缺くも明治元年十月十五日頃なるべし）

九六　楢崎賴三宛書翰　明治元年十一月三日

過日御約束仕置候故御立までに可認置と奉存取紛失念仕候則御一笑に備へ申候弟元來不知字甚銕面皮に御座候得ども只々微志を陳候までに付左樣御含可被成下候速討逆賊云々ゟ一詩は尤恐拙に御座候得ども前途如此もの歟とも相考申候御一見ゟ上御破り可被下候尙御高諭を蒙り度奉存候爲其匆々頓首

十一月三日夜

速討ゟ一詩は六月に認置候に付左樣思召可被下候以上

賴三契兄　　準一郎

（賴三は楢崎賴三）

九七　山本復一宛書翰　明治元年十一月六日

亂筆御推讀

過刻御苦勞千萬に奉存候

一　乍恐　大宮樣を奉始則今日

至尊之眞に億兆之父母と被爲成日月同樣に被爲在候に付ゐは只々御愛情

而已にゐ

御聖德を萬々一も被爲妨候樣之御儀有之候ゐは不相濟候に付得と大道理

御申上置相成度事

一　一旦被仰出候ゐ再び御沙汰相違仕候樣之事有之候ゐは何分萬民への

御信も不相立たとへまわり道と相成候とも一旦被仰出候上は近道とはし

りつゝもまわり道を御通り被遊候樣に被爲成候ゐ

上より被仰出候事は少しも民之疑わぬ樣可成丈被爲成度付ゐは此度自然

も御越年之御都合と可相成歟も難計に付候ゐは脫艦之次第にゐ邊地之民

之艱苦を難被爲捨置不得止之御都合得と　宮中は不及申市中へも相徹し

候樣御說示之御手相立居不申ゐは不相成と奉存候事

一　立太后之御事に付先刻申居候事得と御申上被下どうと歟可然御都合

を奉祈上候事に御坐候誠に以

皇統連綿御繁昌被爲在候御儀は只管奉仰祈候事に付無止事は御東下之御

運に相成於東京

立太后御大禮被爲行候ゐは如何來春にゐ不苦御事に御坐候得ばよろしく

御坐候得とも自然來春御問にゐも被爲在候得は其運如何と奉存候事

一　婦女子を遇し候には只々道を以て而已にゐも參り不申況哉

皇國には婦女子へ之學問敎へも無御坐候故得と其常情を察し且愛し且敎

へ誠を以盡し候ときは必大に相さとり候ものにゐ御坐候先此度

御東幸被爲遊候に付候ゐも御女儀方は御案し被爲遊候御事に付

御安着に付候ゐは何卒あづま之產物等にても何歟澤山に御贈り被遊度奉

存候士大夫流義而已にて世間を見候ゐは必其實は擧り不申候聖賢と雖も

人によつて遇はちかひ申候事

（戸田和州は戸田大和守忠至）

右邊ゟ御運に相成候はゝ此度戸田和州を是非一兩日御とゞめに相成厚く被仰合あづまの御品もの等も御持せ被仰付候はゝ御主意徹底仕候ゟ必可然と奉存候和州明日出立と申事に付一兩日見合ゟ事申置候に付相公思食

（相公は岩倉具視）

御決定被爲在候はゝ今一應是非とも相公ゟ命を以一兩日和州に見合候樣御達被爲在度奉存候明日出立にゟ不苦候はゝ此段尙和州へ御達被下度兎に角右ゟ都合に付弟より一兩日御見合可被成い細は相公より御沙汰可有之と相傳置申差向ゟ事故御了簡奉願候匆々頓首

十一月六日

（此書宛名署名を缺くも木戸孝允が山本復一に贈れるものなり）

九八　名和緩宛書翰　明治元年十一月八日

（大久翁は大久保利通）

朶雲奉拜誦候此際大久翁歸り候ゟは實に公事も困り候事而已可談人物は只彼一人にゟ御座候今朝承り候にも彌近日出立ゟ由只其用意而已行かゝり候ゟ御とゞめに相成候ゟも彼必大困迫と相察られ申候二字と申候は今日

皇居より議定方御一同横濱へ罷越候に付參　殿不得仕候間近情尙要件老兄まで御噺仕置度と奉存候御苦勞を願ひ候譯に御座候可相成は奉願候先は大取込御答まで匆々頓首拜復

名　和　樣御密復

（名和靱）

木　戸

九九　伊藤博文宛書翰　明治元年十一月十日

彌御清安奉大賀候過日は御妨仕候さては御出港を只々御待申候如早晩待ぼけにゟは實に困却いたし候間御樣子鳥渡御聞せ可被下候御暇ゟ日限も有之尤追ひ願はいたし候得共誠に面倒にゟ困り申候先は右御尋旁奉呈候

草々頓首

霜月十日

尙々別紙乍失敬御家來へ被仰聞早々相達候樣奉願候以上

芳梅契兄御直拆　　鐵面生

（芳梅は伊藤博文）

一〇〇　伊藤博文宛書翰　明治元年十一月十二日

亂筆御推讀

一荷物中井氏に相頼置申候に付御受取置せ可被下候以上

（中井は中井弘藏）

爾後彌益御强剛に御盡誠大賀此事に御座候稍東北も平定に至り候得共前途之處中々容易に不可語積年之微志始終を全し聊

皇國之御爲に欲盡は尋常諸藩一樣之目にゐ實に不相濟候處內外中之また內外之苦心痛念近頃氣力も甚衰弱只々往末を謀り將來を思ひ候而已にゐ御座候何分にも此處は冥々に御盡忠肝要に御座候美服人之指をうれひ功名神之惡にせまる古今一徹と奉存候折節深山之花を愛し折節一時之怒りを慰する丈けにゐ御勘辨たとへ不惡之敵と申候ゐも許して隣樓に割據を不願などは世間此節之公論に不相叶聊御注意有之度弟偶不圖も東武之地に再遊往事を思ひ起し如大夢に覺申候未好風景之地に出逢不申只々依然一書生に似希望致し候之心事而已奉存候御笑察可被下候任幸便御見舞旁一書相呈候其中時下彌御自愛第一に奉存候匆々頓首

十一月十二日

尙々今日之光景にゐは長崎は必々衰微に至り可申何卒長崎之冗物と相成候ものを兵庫神戸浪華當りの當用に御移し相成後來之御良策申上も疎と奉存候得ども任筆得貴意置申候以上

芳梅兄醉筆御免　　干令狂生

（芳梅は伊藤博文）

一〇一　森寺常德宛書翰　明治元年十一月十三日

先以御安榮御精勤奉大賀候さては昨日罷歸候に付於

御殿御待申上拜鳳可仕之處早急達ゟ可申上ほどの事も無之候間乍失敬一先歸宿仕候且又今日鳥渡三條公御旅官まで罷出候處何分にも道中已來之風氣しか々々無之甚難儀仕候に付直樣引取申候間何卒萬端よろしく奉願候いつれ快氣次第參上仕候ゟ緩々御噺可申上候其爲匆々頓首九拜

十一月十三

尙々渡邊氏へも御逢御坐候はゝよろしく奉願候拜

（渡邊氏は渡邊昇か）

（此書宛名署名なし尚くも木戸孝允が森寺常德に贈れるものなり）

一〇二　野村素介宛書翰　明治元年十一月十三日

例之長文亂筆御推覽可被下候弟も可相成は一應速に歸京仕度と只々相願居申候以上

朶雲拜誦先以

君公倍御機嫌克御互に奉恐悅候且又　老兄御壯榮に御盡誠大賀此事に奉存候さては御懇切に件々被仰越誠に以難有奉萬謝候一應爲御安堵應廉御答申上候尙御承知之儀も御座候はゝ何卒示諭奉願候

（君公は毛利敬親をいふ）

一邪蘇敎御所致之儀內信外拒などゝ申事は毛頭無之候得共如御承知先年來之行がゝりにゟ各國より殘酷之御所致有之候など本國へ相聞候由にゟ各國政府より建言いたし居申候いつれ所致次第にゟ終に戰爭にも至り可申歟一艱難にゟ御座候我

日本に制禁之事に付候ゟは何とも彼より申出候譯は無御座候得共古今大に相異致し居候事も有之尙各國通信と申事に付候ゟは外國人我神社へ參詣仕候とて嚴酷に苦しめ候道理は無之などゝ其情之相通し兼候事不少他日之戰爭の心是より起り候歟と被相察申候宗堂を建などゝ申は夢々無之事にゟ思もよらざる次第に御座候

一大政官中已下より賄賂被行候云々是は實に難被免事も有之申候中には中已上にも油斷相成不申是には誠に困窮之至に御座候言路壅塞と申事は

決ゐ無之樣相見へ申候天下公議人と申ものを列藩より被差出廣く天下之公論を御採用之譯にゐ御沙汰相成候處只々公議人二十人三十人丈け之論にゐ其内にはまた種々之朋黨有之或は因循連或は攘夷連開國連尊德連など有之また油連など名目之相着き居候ものも御座候必竟天下之公論を御採用と申事に候へは列藩は不及申府縣におゐても公論之被行候次第無之ゐは終に如此風と相成天下之益にも相成不申付ゐは論するものも聽ものも總ゐ議事之體裁相立天下之公論御採用有之私心私見を以不可決之基無之ゐは不相成に付當節土佐中納言殿始其引受之御用にゐ取調らべ居申候此後は何分にも公議事眞に相擧候外良法無御座歟と奉存候我

（土佐中納言は山内豐信）

皇國は　皇國之國體ありて西洋各國などゝ一樣に元より難被相論事は有之候得共抑今日之

御一新と申候ものも只千や二千之人而已之盡力にゐこゝに至り候と申譯にゐも無之候間大に衆議を取り候規則は相立不申ゐは相濟間敷歟と奉存候

皇國にゐも同樣之事に御座候得共西洋各國にゐも國内之公議を起し候と申事は一年中に幾十も有之候など申事は決ゐ無之いづれ之國にゐ年中に三件歟又は四五件位と申事にゐ御座候

一黜陟不得其當云々是又大概は當を得候歟と相考申候乍去今日退けられ候ものより重罪にゐ相漏れ居候ものは必可有之實に役人も色々の名目にゐ如林相連居三百余萬之人民其上關八州之知縣事等も甚失策不少人心之邊も甚痛案仕居申候東京之役人にも中には北越柏崎邊にゐ賊中に入官軍へ放火いたし候ものとも段々登用に相成居頭立候處にゐは無之候得共實に不都合千萬之次第一々情實も不相分只形ちと上而已にゐは一樣に相見へ匆卒には手も難被着大困窮之至に御座候御垂察可被下候漸々に無之ゐは的中之邊相知れ兼申候尚御高按も被爲在候はゝ御示教可被下候奉願候

一當度外國より前件之廉其外申立云々是又別に申立候事は更に無之自然

と種々之疑説は相立可申乍去元來之勢此後は不得止とも山口と萩と申樣
には至り可申候是則容易之事にゐも無之候得共自然之勢いづれ之日歟必
不知々々其都合にも至り可申候是は天下之公論と愚考仕候先は爲御安堵
大略申上候東京は差置奥羽など丶關西之情實とは實に雲泥之相違にゐ此
往き之處は只天下之人情明月蘆花秋一般と申邊に至り不申ゐは始終之處
皇國御維持海外までも
御國威相輝候など申事は不思寄次第にゐ今日之有樣を以將來を推考仕ま
た各國日に振々之勢を見候ゐは苦憂之至に御座候何分にも今日は大に全
局へ着眼仕候ゐ諸事齊敷參り候樣にと而已存候得共中々微力難奈萬國公
法など丶申候ゐも是又人之國を奪ひ候之道具にゐ毫も油斷不相成今日世
間縱横往來相開け居候に付名目無之ゐは猥りに人之國も不被奪故不得止
如此之法を立候もの歟と愚考仕候弱國は此法を以奪ひ强國此法にゐ未奪
れ候を不聞安心不相成世界に御座候于時先日井原小四郎東着仕候處同人
は公議人にゐ當時
御駐輦に付候ゐは公用人之御用不少然處兎角内藤（内藤は内藤左兵衛）は公用人一樣に井原へ
何事ももちかけ井原も甚不納得之由是又左も可有之必竟
朝廷之御體裁におゐては分明に相違仕居候事に付差かゝり候義故不得止
別紙之通申來り候都合にゐ内藤左兵衛へ相達し置申候差向御用筋相闕候
事不少候に付右之次第に相計らひ申候間何卒別紙
儲君之　御聞に被爲及置可然奉願候右御答旁奉呈候其中時下御自愛
邦家之御爲肝要に奉存候匆々頓首拜
十一月十三日
尙々東北丈け之處稍平定に至り候得共民事等も擧り眞之御平定に至り
候には容易無之其上此度德川脫艦箱館に據り候には實以困窮何分にも
速に御平定之策無之ゐは不相叶候處於
朝廷は未一艦も堅剛なる分無之に當惑仕候且又開港場所之義に付甚難

澁不少候○奥羽諸藩ゟ御所致等も爲其に延引に相成申候且御所致に付候ゟは諸藩ゟ建言議論樣々今日ゟ處にゟは必至に無殘處武器盡取揚けに而已相かゝり居申候

御發輦前

御所且つ相公邸宅等へ投書有之是はおもに

（相公は岩倉具視）

御東幸をとゝめ奉るゟ事と攘夷論にゟ御座候逐々申出候ものも有之尙探索等も有之候處肥後人巨魁と相成候ゟ頻に煽動仕巨魁中ゟ魁たる連は轟武兵衞等と申事にゟ御座候於爰元も大に此藩へは不服ゟもの不少已に當夏阿州侯へ東下ゟ命有之候節住江甚兵衞河上顯齋兩人微行いたし候ゟ阿侯ゟ御東下をとゝめ國内ゟ俗論家等も其に應し今以其病有之阿侯も御心痛にゟ一應御歸國被成度との事にゟ彼藩壯烈ゟものは甚憤懣仕居候

（阿侯は蜂須賀茂昭）

（大原老卿は大原重德）

御發輦ゟ節にも大原老卿を迫り立終に大津まで御出にゟ

御東幸を御とゝめ被成候色々ゟ故障有之候御聞及も有之候はゝ御示し可被下候吳々も御高按無御容赦御示敎平に奉願候拜

宇宙老兄内御直拆　　干令生

（宇宙は野村素介）

一〇三　中井弘藏宛書翰

明治元年十一月十三日

亂筆御推覽奉願候山口翁ゟ宅弟に授與は出來申間敷歟何卒先此邊に拜啓昨夜は大失敬何も御容赦可被下候何卒迅急に御運早々御出浮奉待候相調候處得之へ無此上と奉存候乍去强ゟ御嘶仕候儀急にゟは無之候小松大夫暫御歸國に付候ゟは願書御出し可然との事に付爲認候ゟ差出置間只々　老兄ゟ御含にゟ奉願申候以上

（山口翁は山口範藏）

（小松帶刀）

い曲大久翁へも申上置候間速に相運候事と奉存候寺島翁には不圖御高意に預り候付可然御致意奉願候

（大久翁は大久保利通）

（寺島翁は寺島宗則）

一サトー氣付金札へ改印ゟ處乍御手數巨細に御認置可被遣奉願候實に此

（英人サトウ）

事延引仕候ゟは

朝廷ゟ大損にゟ御坐候よろしく御含奉願候事

一邪蘇一條へゟ書面一度

皇居へ御廻しに相成候上にゟ公使へ御示し必々可然と奉存候事

一蘭公使へは十分に說諭論談幾應にも我用に相立候樣御はらひ有之度此段寺島翁始御疎無之事に御坐候得共乍此上尙奉祈念候事に御坐候事

（寺島は寺島宗則）

一佛もどうぞ我用に相成し度春來諸侯も於京都

主上御前に相誓ひ尙東京におゐても關東諸侯相誓天下一に相歸し實に脫艦は其礙地とては寸步も無之眞以流浮のものに付とう歟いたし中立論を相とき度ものに御坐候何分にも是をとき不申ゟは

皇基ゟ相立候處に機會を失し申候甘く此邊ゟ條理をブロイセン公使にも相解何卒其運ひに仕度御含にゟ一御盡誠被爲在度奉祈念候實以今日ゟ大急務にゟ御坐候事

一長崎兵庫又は上海邊にゟも一ゟ堅剛ゟ一大艦を相求め開陽を摧きき候基ゟ盡力相調候事に御坐候得は無此上御盡誠乍此上相成候事に御坐候はゞ偏に奉願度上海にゟは趣向は出來ぬもの歟と奉存候今日此一事を片付候と

皇國ゟ一大利を起申候遷延に至り候ゟ疲弊を一入助け申候事

先は右申上置度奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候匆々頓首拜

十一月十三日曉　無　埒

尙々千萬乍不敬弊宅ゟ事若狹と歟申人へは訖度被仰聞置度奉願候何分にも無御失念奉願候且又明地ゟ處町田先生へ御噺し置被下度是又速に入手仕置度奉存候拜　狂　生

（町田久成）

櫻　洲　老　兄御內拆

（櫻州は中井弘藏）

一〇四　大津四郎右衞門宛書翰

明治元年十一月十三日

爾後彌御清榮に御盡誠奉大賀候乍去余り御盡誠過き候ゟも却ゟ御老體には如何可有之哉と奉存候弟も東着後且々在職仕居御放念奉願上候いづれへ罷越候ゟも兎角盗賊糺明方歟又は老骨ニやりて姥ニ役めに出合甚以困窮至極是又御奉公と相考不得止も人ニ顔色を不窺此時と心丈け盡し候得共實に腹ニ立候事も不少舊來御承知ニ通京でも御國でもまた京でも江戸でも難澁役目のみ少しは老兄なりとも因果ものと御推憐可被下候只々宿志ニ孤劍遊天而已を頻に希望仕候東着後も目にふれ耳にふれ候もの却ゟ無窮ニ感慨を生し只管往時を思ひ出し申候さて々々浮世の中も不面白事而已にゟ御座候弟も成丈け速に一應歸京仕度と奉存候東方ニ事も大事件大半途其上に日々如沸に出來込り入申候乍去一平定ニ目的は不相立ゟは不相成事と奉存候于時出立前御内話も有之候處半途にゟ相立時々御案じ申候いつれ逐付一應歸京も可仕候に付其まで御しんぼう可被下候及力候事は元より何事ても拜承可仕候先は御見廻旁奉呈候其中時下御自愛第一に奉存候匆々頓首拜

十一月十三日　　老梅生

松屋老兄御内拝

（松屋は大津四郎右衛門）

（木戸孝允に老梅書屋の號ありて略して老梅と書す）

一〇五　岩倉具視宛書翰

明治元年十一月十四日

朶雲謹ゟ奉敬誦候昨日勝拜謁仕候節大義御示諭彼謹ゟ敬服仕候次第偏に御誠意ニ徹下仕候處と難有奉感佩候

（勝は勝安芳なり）

今朝大久保へ罷越勝直々相談候て尚又可然大久保決ゟ疎は無之事と奉存候

（大久保は大久保利通）

此度ニ御都合に御座候得ハ對世間候ゟも稍安心仕自然箱館ニ事至鎮定候はゝ慶喜におゐても世上へ面目相立是まで眞に微誠有之會桑等ニ爲に壅塞され居候事に御座候得は此度ニ實行におゐて眞に微誠も相顯れ千載に其

名を洗ひ候次第是又
朝廷ゟ御大仁
相公ゟ御公照より出候事にゐ爲天下奉恐慶候是邊ゟ儀得と勝等も奉體仕
すゐは不相濟候先は乍恐御答までに奉言上候頓首百拜

（相公は岩倉具視）

十一月十四日　準一郎敬白

拜呈

（此書宛名を略せるも岩倉具視に致せるものなり）

一〇六　片山貫一郎宛書翰

明治元年十一月十五日

亂筆高恕

爾後彌御清適大賀此事御座候二に弟且々消光乍憚御放慮可被下候さて東北ゟ光景も御一別後種々變遷候得共稍此節平定に至り申候乍去前途ゟ處中々不容易儀と被相察申候

皇國屹度御維持ゟ目的相立不申ゐは乍恐
大政一新も名而已に成果可申と竊に苦念罷居申候今日ゟ事は只大義名分ゟ上より至于此候事多く付ゐは衆議ゟ歸する處を以決に至り候事不少候得共また後世筆誅は難被免事多く可有之と被存申候御高按も尙拜承致し度奉存候さて又當夏梅屋額面ゟ事相願置候處其後何たる御沙汰も無之いかゝ哉と奉存候元來彼額は高杉氏ゟ方より入手仕候處未半途ゟ事も有之候由故此儘弟所持候ゐも甚以不安候に付何歟相當ゟものを以相償候事に御座候得は無此上と存居申候ゐ當夏は老兄へ御願仕置候次第に御座候岡本作兵衛歟ゟ噺と歟にゐ弟梅屋より奪ひ去り候樣ゟ聞も有之候由誠に心外ゟ至に御座候如此ゟ風流は弟元より死すとも不欲處朋友間に御座候得は一興となし候事も御座候得共梅屋などへ誓ゐ施し候事に無之返却仕候方可然候はゝ早々留守へ可申越候間乍失敬老兄よろしく奉願候相當ゟ他物を以相償ひ可然候はゝ是又早急に乍御手數御示諭被下度人生如朝露如

（梅屋は萩町の豪商）
（高杉氏は高杉小忠太春樹）

此事と雖も不安もの有之申候御推了被下よろしく奉願候先は右御願まで
鳥渡奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候匆々頓首

十一月十五日

準一郎

尙々御左右を御まち申不圖延引仕候彼望み候もの御座候はゝ御含にゐ
老兄より御示可被下候實に早々相報ひ可申候拜

貫一郎先生御直拆

（貫一郎は片山貫一郎）

一〇七　名和緩宛書翰

明治元年十一月十九日

昨日は御光來奉多謝候外國人參
朝に付ゐゑ一件はい曲大村へ可相通と存申候尙御序も御座候はゝ老兄より御直にも御通し有之候はゝ可然奉存候池邊ゑ一條甚不可然と存大木へも相談じ置申候是は被免候ゐは必可然候今一條は意心傳心にゐ御座候さては羽州より歸り候兵ゑ一條余り會計無情歟と存候肥前兵ゑ都合も有之

（大村は大村益次郎）
（池邊は池邊藤左衛門節松）
（大木は大木喬任）

強ゐは不被申候得共始仙臺よりゑ艱苦不容易次第とふ歟
相公ゑ思食にゐ御一聲は相叶申間敷歟御勘考までに鳥渡得御意申候い細
は桂太郎より直に御聞取可被下候先は爲其差急匆々頓首

十九日

木戸準一郎

名和緩樣御直披

（相公は岩倉具視）

一〇八　槇村正直宛書翰

明治元年十一月二十日

大亂筆高許

爾後引つゝき御盡力彌御清榮大賀此事に御座候逐々當地ゑ光景も御承知
可有之實に難題而已何も御想察可被下候さては留守中彼是御高意に預り
候由多謝此事候廣澤よりも逐々書翰不一形盡力ゑ由段々申越候事も有之
候に付此度及返答申候い細は作間より何も貴兄へ傳意仕吳候都合に付可
然御願申候且又是まで月給等月々長松より送り越吳候處實途中往返彼是

（廣澤兵助）
（長松は長松文輔幹）

面倒不少候間千萬乍御手數御取下け被下候ゟ留守へ得と御申聞け被下仕廻置候樣御差圖御賴申度左候へは其を引當てに於爰元借用相とゝのひ申候然し是も多人數は於爰元相とゝのひ不申候に付役所向之都合不可然候はゝ爰元へ御送り越被下候之御都合にゟ御取下け可被下候是までは度々長松より送り呉候得共途中之處甚以面倒千萬に御坐候先は右御賴み旁相呈申候其中時下別ゟ御自玉第一に奉存候匆々頓首

十一月廿日

半九郎雅兄御内披

（半九郎は横付半九郎正直なり）

尙々御多用之央種々御面倒御賴み申何とも恐入候次第に御坐候乍此上可然御賴仕候以上

準

一〇九　名和緩宛書翰　明治元年十一月二十二日

朶雲拜見致候取ちゞめ利金とも當境に御預り仕居候分三千金計も有之歟と相考申候小々の事は算用不仕ゟは不相分京都に申越候はゝ如何とも可相成委曲御面談之上承知可仕候間御寛置可被下候今日歎願書差出置暫時之事に御座候間早々御許容を奉願度自然御噂も御座候はゝ程克御執成呉々奉願候御扇面は慥に落手乍鐵面皮相揮置可申候爲其草々拜復

廿二日

尙々是非々々御序も御座候はゝ一兩日中に拜青仕度奉存候拜

木戸

名和樣内拜復

（名和緩）

一一〇　名和緩宛書翰　明治元年十一月廿四日

亂筆御推讀可被下候御別紙は直に條公へ御廻し申上候筈歟とも奉存候得共一應申上試度盟兄まて御廻し申候間よろしく御取成奉願候

華帖拜見彌御清適大賀此事に御坐候先日來不快之處一昨日外國人參朝に付推ゟ出仕高輪まで終に罷越夜深歸寓再感之氣味にゟ難儀仕候明日

はとふそ取繕候ゟも出仕仕候覺悟に御坐候一別御紙は一昨夜大久保より（大久保は大久保利通）
相廻し申候一應愚按丈け相認め見候に付盟兄得と御一見被下付紙は御取
除可然儀は　相公へ被仰上可被下候匆卒に相認め付紙ゟ文意不敬多く奉（相公は岩倉具視）
恐入候間よろしく奉頼候大久保は別紙ゟ通申越候に付大概同意ゟ事と被
相考候愚按ゟ處は付紙丈け ゟ處にゟ御坐候東北諸藩ゟ御所致急務にゟ御
坐候阿州公御引受けにゟ御取かゝり軍務等へも御日勤にゟ暫ゟ間御調ら（阿州公は蜂須賀茂昭）
へゟ御都合に御坐候速に御運ゟ事と奉存候重大ゟ事に付疎漏有之候ゟは
實に不宜又人民も必不服可有之と奉存候
一仙臺一條ゟ書付開込候處差出申候是又相公へ御口頭にゟ被仰上候ゟも
よろしく書物は何卒阿州侯へ御廻し有之度奉存候
一池邊至ゟ質直ゟ人物にゟ横濱へ罷越候ときは余程札等ゟ事も勉勵仕候（池邊は池邊節松）
都合にゟ歸府後弟も不快にゟ引籠居申候處同氏も御斷りを申出候と歟承
り候に付段々と說諭是非勉勵候樣誠心を以申越候處一應はどう歟御受け
候ゟ又々出勤候樣ゟ樣子に御坐候處又候別紙差越申候御一見被下候ゟ其
意味被仰上可被下候
一別紙會計ゟ事に付申出候書面御廻し申候木田と申仁は余程正直ゟ由氣
付も尤歟と被相考申候
相公御覽被遊候ゟ至極に被思食候はゝ　相公より直に會計ゟものへ此要
趣相貫き候樣被仰聞奉存候事
先は右得御意申候付紙は得と御覽被下不都合ゟ事有之候はゝよろしく奉
願候大久保と池邊ゟ書面は弟へ差越候分に付御一見後は必御返し可被下
候奉願候匆々頓首拜復

十一月廿四日　　準

緩　盟　兄（内密御直披）

（名和緩）

一一一　名和緩宛書翰　明治元年十一月三十日

御書面拜見決末之處些難被解奉存候處定而
相公御留り不可然との御旨趣にも候哉何分此事は阿侯始諸氏之趣主に任
せ申候中々百年に渉り候重大之事件幾廉となくかく匆卒に十分行屆候事
於天理無之乍去只々あともどりのせぬ樣丈けが弟之微忠と相心得思考を
盡し居申候元より今日之處十分とをもひ候邊は決而無御座候得共また今
日之處に至り候而は進退無一策必々一陽來復には眞之一陽來復に至り候
處之基被爲在度事と而已只管奉祈念候何も御降察可被下候奉復

（相公は岩倉具視）
（阿侯は蜂須賀茂昭）

三十日夜　　允

（名和緩）

名　和　兄内拜復

一一二　名和緩宛書翰　明治元年十二月九日

亂筆御推讀大義名分之事は只今不論家康も當時之參與判事ともより
御手帋拜見仕候
は天下人心を維する處に妙を得居申候間何事も其始を以今日之始を
相公彌十五日揚碇之由
願候事また一肝要と愚考いたし候以上
還幸當日前後は
相公是非御一方は不被爲居而は甚御不都合と奉存候間御用相濟次第精々
御迅急を奉祈候さて弟事昨日立懸けに大久保子内談有之候に付情實分明
に相答へ置彼も逐一承知に而爰元之都合内外國事御役事とも御片付直樣御あとより
御上京と申約束仕置候是非十五日と
相公被仰聞候邊乍恐一圓合點に入不申且其邊は老兄も御承知之通左候は
丶今日に而も出立被仰付度實にケ樣之譯に而は甚困窮仕候然一己之困窮
を申上候儀に而も無之凡
日本は狹しといへども是は五大洲を一目に見候上より之事に而も奥羽に而
も中々日本に而は廣く御坐候只々兎角水を流し候樣事之輕重厚薄之無差

（相公は岩倉具視）
（大久保子は大久保利通）

別折々被仰聞候には甚困窮仕候信長水を流し秀吉水をとゝめ家康水を地中にしませ稍草木を立候氣味有之申候今日之事は百端烏合而已を以相成り候事に付諸事水之流るゝ如くにゐ御坐候未來如何と内外苦心之上に一層また煩念を添へ申候少しは御容赦被爲在度此余は更に不能拜陳草々閣筆頓首復

十二月九日　　準

緩　兄内奉復

（名和綬）

一一三　作間正臣宛書翰　明治元年十二月十八日

今日御待仕候處終に不得拜芝殘念至極に奉存候何卒明日は菱田日下部御同道にゐ御光來舟は櫻屋よりにてもよろしく尤思食次第御便利にゐよろしく林半七も御都合次第そつと御はかりにゐ御誘引可被下候余り堂々はよろしからす候御含までに申上候先は爲其匆々頓首

（菱田は菱田重禧）（日下部は日下部東作）（林半七は林友幸）

十八日

尚々事により候と明朝は格別今日窺候處にゐ御用無之よしに付出勤仕間敷歟とも相考且又京都へ之書狀等も相認度候に付東久卿尚副島子へも程克御致意奉願候鈴木之處も此度はまづ見合候も可然歟とも存申候尤御勘考次第精々御都合相成候はゝ御早く御出かけを祈り申候以上

栖夢　盟　兄御内々　　干令居士

（東久世通禧副島種臣）（鈴木は鈴木直枝か）（栖夢は作間正臣の號なり）

一一四　森寺常德宛書翰　明治元年十二月十九日

大亂筆御推覽奉願候敬白

拜啓は態々御苦勞を奉願候處早速に御光來被成遣難有奉多謝候さては其節御内話仕候一條昨夜も緩々愚考仕前途を思遣り申候處いかにも不堪煩念外國之大に諸侯を疑ひ居候事も元因有之候儀にゐ於于此は四方へ眼をくばり聊も不所致有之候ゐは不相濟萬一も料理を失し候ゐは忽

朝廷ゟ御大難
皇國ゟ御危急と立至り候は必然ゟ儀にゟ再ひ不可復ゟ形勢に押し移りは
鏡に照す如く被思申候吳々も公論を押し立諸事名ゟ立處を以細事と雖も
御所致有之千萬里ゟ外までも言を容るゝ事不能候樣當今
朝廷ゟ御役向偏に御心を被爲盡候御義尤以肝要至極ゟ御事に奉存候付ゟ
は御着艦にも相成候はゝ昨日御相談申上置候通御配慮被爲成尙また是等
ゟ處徹上仕候樣十分御盡誠千祈萬禱ゟ至に奉存候兎に角兩三日中には遲
くとも御着艦に可被爲至と奉存候先は爲其苦念ゟ余亂筆を奉捧呈候前途
ゟ處精々御熟按毫も御拔り無之樣御補助申上るも疎ゟ至と奉存候匆々頓
首拜

十二月十九日　允

大和守樣拜呈御內拆

（大和守は森寺常德）

一一五　名和緩宛書翰

明治元年十二月廿五日

亂筆御推覽、、、後丙丁
爾後彌御淸榮に御上着と大賀此事に御座候東京も都合無別條人心も且々
安堵候間御安心にゟ可然と奉存候御滯在中は不容易彼是御世話に相成奉
多謝候
一御內見へ入候一書は
相公へ差出置機宜を丸に奉願候心得にゟ御座候實に
大政一新にも骨が無之ゟは終に全體ゟ處確乎と相調不申其譯は世上只口
頭而已にゟ
大政一新々々と相唱へ其實は獨り自分ゟ座を廣くし獨り自分ゟ席を高く
いたし候事へ而已着眼候ゟ
大政一新ゟ眞に
皇國を維持すへき處へは更に不氣付にゟ此儘に打過候ときは必以宇內へ

（相公は岩倉具視）

（大久保翁は大久保利通）

（石川小五郎は河瀨眞孝）

ゟ幷立は不及申内地へゟ御示しも不相貫隨ゟ
御威光も不相輝ゟ理必然と奉存候乍去此事また漫に唱へ漫に論じ候ゟ自
然不和ゟ處有之候ゟは其ぎりに相成候に付丸々口外は不致少々遠くより
何となくにびき見候得共此邊へ着眼候ゟ大悟仕候もの無之却ゟ後來國家
ゟ爲と申邊へも氣が着き不申候に付不得止大久保翁へ初夏そつと相論じ
見候處至極ゟ内意に付丸々相任せ置申候どふそ薩長と申都合には及ひか
しと祈念いたし居申候十六年前より勤王々々と人ゟ尾足に隨ひ盡力仕今
日一人も同時ゟ人無之弟一人幸にして此
盛時に遭遇仕候に付ゟは天下後世ゟ爲聊此微意相貫き置度祈念此事に御
座候御憐察被下何も冥々に可然御誘助奉願候
一石川小五郎へ御序ゟ節今日ゟ形勢得と御申越可然と存申候弟も過日大
略は申越置候萬里ゟ外にゟ却ゟ齟齬ゟ事有之候と大に國家ゟ患害に御坐
候

（青木健藏は青木研藏邦彦）

（岩國侯は吉川經幹）

（神山は神山左太衛郡麗）

一曾ゟ一旦御歸國ゟ御噂も有之申候處何卒今少しは御留滯必可然過去ゟ
事を思遣り想察仕見候得ば種々ゟ機會も大に御盡力ゟ自然譯と相成り維
持ゟ處不少尚此際ゟ處實に又不可外事と煩念仕候是非々々兄には御留滯
可然と存申候弟よりも別ゟ御賴み申置候
一青木健藏被召候處是も例ゟ意味合にゟ一應無余儀御斷り申出暫御猶餘
と申都合に相成居申候當人は此時に乘し一奮發盡力仕度主意も有之候由
にゟ此節書狀申越候重ゟ被召候ゟ可然と奉存候内密可然樣に
相公へ被仰上置可被下候
一岩國侯御上京御家督後始ゟゟ御事に付官位等ゟ儀家例にも係り候事に
御座候間此度東北ゟ戰功も有之候事に付駿河守（賀）に被仰付候はゝ難有かり
可申尤是は至急ゟ事にゟは無之神山五位などより公論を以申立候はゝ左
樣被仰付度奉存候御含までに得御意置申候
爾他申陳度儀海岳候得ども不得閑暇何も後鴻と申縮候其中時下御自玉第

一に奉存候匆々頓首

十二月廿五日

（大原卿は大原重實）

尙々頃日大原卿ゟ招に應し小集ゟ宴に陪し往時を追慨はしめて十七字を口に信せて陳ふる

世の中は櫻も月もなみたかな

御一笑

緩　盟　兄

干令居士

準内密

（名和綏）

一一六　南貞助宛書翰

明治元年十二月晦日

大亂筆御推讀可被下候

朶雲奉拜見候彌御壯榮奉大賀候さて當年奥州歸り兵隊の苦情實に見すてがたき事も不少追々に賴みにしたがひ月給を以且々間に合せ居候處其後段々と人數ましに相成是又卽時相退け候譯にも人情至りかね岩倉卿にゟ拜借金仕どふかこふかむらなしに相濟せ候處また頃日無余義賴まれ不少候に付終に策に盡き候ゟ今日は早天より出門仕候ゟ相避け居只今歸宿仕候處則老兄の御書狀參り居申候間拜見仕候處余程御込りの御樣子別人とも違ひ是非少々なりとも御用立申度と奉存且々來春十日頃までの目的を定め三十五金四十金の處を相調明朝なりとも御持せ可申と折角奉存居候處只今又御書狀に付どふ歟御濟に相成候趣承知仕候右の次第故自然御困りならば前書の高丈け御用立可申候御濟に相成候得は弟も仕合申候乍序此段御答申上置候兎に角七年ほど春歟暮歟一向夢心に打過申候處當年はどふ歟春を迎へ候こゝち仕是又　天恩の及ぶ處感泣の至に奉存候乍去往時を思ひ起し候得は弟等而已僥倖の仕合何とも難語盡泣を呑み候までにゟ御座候先は乍亂筆御答まで匆々頓首拜

大晦日

南　盟　兄内拜復

木　圭

（南は南貞助）

一一七　大久保利通宛書翰（カ）　明治元年

（前文缺カ）

如此書面一見仕候眞に上書仕候ものに御座候得共屹度其節是非御糺無之
ては不相濟ものと奉存候實に如此體にては
朝廷は有る而已にて上下君臣之分も政府之御體裁も丸に相立不申浩歎之
至に奉存候鳥渡備
高覽申候敬白

（此書月日及び宛名署名を缺くも明治元年木戸孝允が大久保利通に贈れるものなるべし）

木戸孝允文書　卷九　明治二年

木戸孝允文書　卷九　明治二年

一　宍戸璣宛書翰　明治二年正月六日

亂筆高恕此度は吳々も御末家樣方ゟ上下とも
御主意ゟ腹入仕候所實に肝要と奉存候

拜啓彌
御清適奉大賀候さては逐々申上候通民政ゟ處余程御手を不被爲着ゟは益
民心ゟ方向は不相定と奉存候探索申付候置候もの今晩歸り承り見候得は
前大津邊などにて民心洶々不穩由に相聞へ申候且又大隊ゟ處も且々連合
維持仕候樣御手を被爲下萬一ゟ節ゟ御用意も必無之ゟは不相濟何卒會計
先生達にも二つ一つゟ浮沈得と熟考どふと歟工夫有之度事と奉存候干城
世話役艦々ゟ船將等へ云々ゟ一條御遷延に不相成樣只管奉祈念候先は民

心一條承り候まゝ申上候草々頓首拜

正月六日夜

尙々民政も少しは緩に無之ゐは今日ゑ形勢所詮終に難被御と奉存候小幡ゑ說は如何御末家樣方今日ゑ所以を得と腹入仕候樣速に御盡誠奉仰候無左ゐは御盡力も誠心より不出譯にゐ徹底不仕候拜

（小幡は小幡高政）

（敬宇は宍戸璣）

敬宇　老臺御內拆　　允

二　南貞助宛書翰　明治二年正月十四日

亂筆高恕

昨夜は御光來被下候處早晚は不敬のみ相働何も御容赦是願候さては今日承り候得は彌游擊軍も明日と歟出立仕候由老兄の御盡誠にゐ早品川へも後來　皇國の御爲め御國の御爲め御示諭有之候御內話實以感伏の至に御座候將來の事中々以不容易只々誠意誠心を以冥々に盡力仕候外は無之陽に盡力仕候ゐは不成心も功名の樣に相涉り成る事も却ゐ不成而已ならず妬者は益妬み疑者は益疑ひ怒者は益怒する樣に相成行邦家の爲に寸益無之老兄ゑ冥々に如此度御盡力ゑ邊誠に以時勢ゑ一美事と奉存候明日までにも尙御面會有之候はゝ今一入得と將來の大事を御說諭被成癸丑甲寅就中戊午壬戌癸亥十余年間國事に忠死仕候ものゝ大旨趣水泡に至らさる樣精々骨に入候丈けに御議論被成置度奉祈候實に禍の起る起るの日に起るにあらず今日ゑ際誠御一大事と奉存候昨夜此御噺に感伏仕難默止尙不取敢明日出立の事承り候に付申上候別に御噺の一條は容易に難被申上明後日までに得と勘考ゑ上御答可仕候明後日延引仕候へは十七日までには無相違申上候間左樣御承知可被下候爲其匆々頓首拜

正月十四日

貞　助　樣內密御直拆

（貞助は南貞助）

準一郎

三　菱田重禧、作間正臣宛書翰　明治二年正月十九日

亂毫御推覽奉願候且乍失敬土方兄へ可然御致意是又奉願候

（土方は土方久元）

先以

各位御清適に御精勤奉大賀候さて昨宵秋月侯へ參上候處いかゝゝ拍子歟

（秋月侯は秋月種樹）

不圖大醉前後得と辨へ不申歸寓仕頃已に鷄鳴を過東大二卿方へも大不敬

（東大は東久世通禧大原重徳二人なり）

相働候事と甚以恐縮罷在申候今朝は參

朝仕候覺悟に御座候所右之仕合にゝ持病之頭痛一入增長仕候乍去自ら相

招き候事にゝ少しも申立には不相成候得共現場之處甚難儀仕候今日格別

御用無御座候得は今日丈け御了簡を奉願度尤何歟御用御座候得はたとへ

途中にゝ相斃れ候とも參仕不仕ゝは難相濟事にゝ御座候内々各位へ御願

申上候に付御都合を以そつと

東大二卿へ御寛被成遣御一答を玉わり候得は無此上難有奉存候右御願之

爲め奉捧呈候匆々頓首九拜

正月十九日

海鷗

栖夢　各盟兄御直拆

（海鷗は菱田重禧栖夢は作間正臣）

松菊

醉狂夫

四　岩倉具視宛書翰　明治二年正月二十日

謹ゝ言上仕候先以

御機嫌克被爲遊

御奉職恐賀至極に奉存候爾後東京も別に相變り候儀無御座先平穩に御座

候間乍恐御安慮被爲遊候樣奉存上候

一頃日風と傳承竊に仕候得は御辭職御歎願被仰出候由全僞聞歟とも奉存

候得共甚以不安寢食懸念罷居申候乍恐此際突然御辭職被爲遊候ゝは前途

之方向如何可相成哉實以爲

皇國痛歎至極に奉存上候頓に　三條卿にも御着京被爲遊候御事と奉存候

（牛字は欠の記號にして筆者の附したるものなり）

元より御同意被爲遊候御儀被爲在間敷と奉存上候得共自然萬々一も如此
御都合に御座候ゟは最早凖一等
御奉公申上候張合も無御座速に御放逐孤劍游天ゟ一念御遂けさせ下し玉
わり候樣只管奉祈願候今日ゟ　御興廢に相係り候大事件に付片時安堵も
難仕不取敢奉窺上候に付萬々一も
思食被爲在候御事御座候はゝ誓ゟ今暫ゟ處必御停止奉願上候
一先達ゟ月給ゟ儀に付諸官ゟものへ乍恐御信を不被爲失ゟ
思食歟昨夏來半減に相成居候分は御拂戻し被仰付候由誠に以難有御事に
奉存候得共今日に當り候ゟ恐多くも此御信は末ゟ末にゟ何卒天下萬民へ
御信を終に不被爲失樣被游度付ゟは是等は益半減に被仰付候方實に難有
奉存候今日ゟ委にゟは終に天下ゟ武備充實は何にゟ相とゝのひ候歟と深
く苦心仕候何分にも
大政御一新ゟ御實行相立不申ゟは今日生存いたし居候ものゝ天下後世へ
申譯けは相立不申と奉存候給も五等已上を斷然減し九等當りにてもせめて二
十金二十五金は玉わり候樣被仰付度無左ゟは終に惡弊は止み不申且上よ
り罪人をこしらへ候に相當り申候必竟御不仁と申樣に立至り候ゟは奉恐
入候事に御座候速に一般に至正至公ゟ御詮議被仰付度奉存上候
一　横井平四郎ゟ一條必竟爲
朝廷奉恐入候事にゟ御座候彼近頃いか樣ゟ說を相立居候歟は存不申候へ
共今日言路開明ゟ御時節如此儀有之候ゟは後來何を以
朝威相立可申哉何卒
朝憲ゟ屹度凜然相立候樣には御所致被爲在度奉存上候事
一　西園寺卿此度御歸京被遊御遠游ゟ御內意被爲在候御樣子奉窺候乍恐
此卿氣才兼備他日訖度
朝廷ゟ御用に被爲立候御儀如掛鏡に奉存上候今日ゟ際小事に御奔走被游
候はいかにも爲天下遺憾至極に奉存上候何卒

（西園寺卿は西園寺公望）

相公ゟ御盡力を以斷然早急に御遠游ゟ御宿志被爲遂他日
皇國ゟ御大用に被爲立候樣奉祈念候依ゑ此段内密奉言上候

一　頃日傳承仕候處にゑ東北地ゟ人心不穩趣も有之候歟に相聞申候萬一
も此事眞事にゑは實に今日ゟ御大事と奉存候必竟彼是手違ひも有之未箱
館ゟ方ゟ運ひも相着き不申旁ゟ邊より相起り候事と愚察仕候箱館一條も
誠に心迫き申候得共軍艦ゟ都合彼是齟齬有之延引に至り奉恐入候いづれ
不日に相發し來月中旬までには無疑平定仕候都合に御座候間必々
御煩慮は不被爲游樣奉願上候東羽ゟ事も丸々形ちゟ無之事にゑは無御座
事と愚考仕候へども決ゑ油斷は諸局不仕候に付是又御安慮奉願上候

一　後藤象次郎罷越候趣にゑ其上にゑ交代との御沙汰を蒙り居日々御待
申候得共未着不仕いかゝ哉と愚考仕居申候東京細事相應に有之日々東北
諸藩ゟ苦情訴出候には甚當惑仕居申候御推察奉仰候右ゟ外別に相變り候
事も無御座候第一條ゟ儀幾應にも
皇國ゟ御爲め蒼生ゟ爲め被爲
思食止候樣只管奉仰願候誠惶々々頓首百拜

正月二十日

謹緘

密呈　　孝允

（此書は宛名を略せるも岩倉具視に致せるものなり）

五　大村益次郎宛書翰　明治二年正月廿一日

華帖奉謹誦候明朝御光來被下候との御事奉畏候弟明朝參上可仕候御多務
ゟ央何も無御用捨奉願候製銕艦も彌今日御受け取ゟ御都合御配慮と奉存
候奥羽ゟ眞安堵に至らざる邊得と相窺度奉願候昨日もちらと承知仕候得
共南部人ゟ説にゑ不足取事歟と相考申候處油斷大敵實に機を失し候ゑは
不相濟儀と恐懼仕候何も拜青と申縮候爲其匆々頓首拜復

正月廿一日　木圭

大邨先生

（大邨は大村益次郎）

六　黑田清隆宛書翰　明治二年正月廿三日

亂筆高覽

拜啓過日は
御光來被成下折柄取紛失敬申上候早速御旨趣之邊軍務官へ罷越陳述仕候處先生已に御出被爲成候ゆい曲御相談も有之候由大村益次郎より承知仕候に付早々御答申上候邊も延引仕候尙御尋申上候ゆい細御高話も相窺ひ可申と奉存居候處兎角取紛失敬仕候いまに軍艦も不相揃よしにて出發之期も一定不仕都合甚心配仕居申候嘸々御欝然と奉察候先は右御斷旁一書奉呈仕候其中何歟御用も御坐候はゝ無御腹臓被仰越可被下候爲其匆々頓首拜

（了介は黑田了介にて黑田清隆）

正月廿三日　了介　準一郎

樣御直拆

七　大木喬任宛書翰　明治二年正月廿四日

大亂筆高恕

拜啓先以
御清榮に御精勤奉大賀候さて過日は罷出種々御馳走被仰付奉萬謝候早晩も及大醉前後大不敬之至何も御容赦奉願候さては暗殺等之一條に付御府へ過日御沙汰被仰出候由始其御樣子は承知仕居候得共一向御文面等も得と承知不仕候處どふ歟御苦慮之御沙汰面にゆも有之候歟之由後にゆ承知仕必竟弟等不屆之次第と苦心仕居申候其根元は別に根も無之事にゆ逐々亂暴人等も有之候由之處下吏之邊にゆ壅塞仕居自然上通不仕邊も有之候歟にゆ刑法軍務などにも心配仕逐々行政官にも承知にゆ爲後來下吏御取

締ゟ御一端とも申邊より御決議に至り候事と奉存候い曲一應參上仕候ゟ得と可申上と奉存候處彼是取紛殊に昨今風雨にゟ乍我儘御無沙汰申上候別にも得と御相談仕度邊も御座候間不日參上仕候ゟ相窺可申候弟も不日上京可仕と奉存候間何歟御用も御座候はゝ無御腹臓御示奉願上候先は其爲匆々頓首九拜

正月廿四日

（松浦は松浦武四郎にて松浦弘）

尙々本文ゟ趣御含を以可然判事衆へも御傳へ置可被遣候是等ゟ事に付候ゟも得と御相談仕置度局々區々に相成氣脉不相通各一天地を立候樣に相成候ゟは甚不面白是邊は極密相窺置度と奉存候松浦上京ゟ一條は弟も不可然と奉存候世の中ゟ一害一利不可言ところに有之困り入申候

拜

（大木は大木喬任）

大木老大兄　御密拆御投火　　木圭

八　大村益次郎宛書翰　明治二年正月廿七日

（僧は小出鐵之助なるべし）

彌御清榮奉大賀候さては過日御内話申上置候會津人ゟ僧いづれに寓居仕申候哉且名は何と申候哉一應面會仕見度段々舊會藩ゟもの不安心情も有之候歟ゟ由是又實に無理ならざる事と愚察仕候付ゟは意心傳心に朝廷ゟ御旨趣を示し置しんぼふ爲致ものと相考申候至今日候ゟは天地間ゟ蒼生只一人と雖も御無理ゟ御所致有之至情ゟ通徹不仕樣ゟ儀有之候ゟは甚以遺憾ゟ事と奉存候何卒寓居名目御示し可被遣候事

一降伏兵逐々御盡力にゟ稍御規則も相立出精も仕候由付ゟは議定方にも調練等一應御見分被爲成度御都合も被爲在候はゝ何卒御示諭可被下候

降伏兵初ゟ見分にゟも被仰付候事に御座候得は安堵仕規則を守り候ゟ御奉公仕候樣にとの被仰聞位は有之候ゟ可然歟とも奉存候左候はゝ彼等も彌安心可仕候是又御示諭可被下候

先は右申上度匆々頓首拜

正月廿七日　　木戸

大村先生

（大村は大村益次郎）

九　大村益次郎宛書翰　明治二年正月三十日

爾後先以御清適に御盡誠奉大賀候

一仙臺御嘶一條は其々相運ひ漸一々其達しも相濟於彼藩も大安堵致候よしに御座候

一佐渡ニ一條も先日御嘶被爲在逐一至當ニ御論と奉存候付ゐは凡是より御手下しニ次第廉書にゐも御閑暇に御認置奉願度急にと相考候處當時知府事兩卿とも越後御引取判事にも任するもの無之色々ごた〳〵いたし居候に付右無餘儀時機を計り候都合にゐ御座候

（兩卿は四條隆平西園寺公望なるべし）

一嘗ゐ粗御嘶仕候大義名分を正し皇國一致ニ基礎を定め愚論昨春來冥々に盡力仕置候義漸此節少敷芽か出候樣子に被相察内々大悅仕居申候

一幕府か挫け候とも幾多ニ尚小幕府か出來候樣ニ次第にゐは終に宇内に卓立ニ御目的は相立不申先一糸口相立候上は漸を以方向を天下へ被爲誘度奉祈念候事にゐ御座候于時頃日西京邊にゐ四方ニ情實を承り見候得は種々ニ議論にゐ此まゝにゐは終には内より又破り候樣に至り不申歟於朝廷も只々内向きの御世話而已外に對し御規模を被爲張候御間合は出來申間敷總浩歎ニ事不少已に先日別紙相認備高覽置可申と奉存延引仕候則差出置申候間得と御熟按偏に奉願上候

速討逆賊行征誅天下只應定遠謨錦旗日暖紫宸殿朝冠穿霞四達衢號令一發七道肅邦内先禁互爭驅億萬黔黎總兄弟忠孝唯在靖衆區

聖意夙斷文武事皇基從是正凛乎往向四方問無禮公戰奮鬪我忘吾版籍何地先連屬明窓靜閲韓國圖

戊辰六月所作

御一笑奉願候餘は得と拜青を期し奉り候匆々頓首再拜

尙々只今認終明後二日ゟ事申來拜見仕候二卿とも八字より十一字まて
に御出可被成との事にゟ御座候雨天にゟもし御間に御座候はゝ又々御
聞せ可被遣候御意　少々玉わりもの等はいかゝに御座候哉始ゟゟ譯鳥
渡申上置候

正月卅日　　準一郎

益次郎先生御内拆

（大村益次郎）

一〇　大村益次郎宛書翰　明治二年正月上旬

亂筆御推讀可被下候

正月元日粗御相談仕置候後も尙倩將來ゟ大勢を推考仕候處今日ゟ人情に
ゟ相移り候時は大政一新ゟ御旨趣も乍恐いかゝ相成可申歟元來御一新ゟ
御一新たる所以は
皇國を御維持被爲遊候ゟこそ始ゟ其御名實相叶候譯に御座候處哀哉可浩
歎は宇内ゟ大勢に對し候時は皇國ゟ急昨年より今日に迫り候處唯目前ゟ
一平定にゟ上下とも其理通徹仕兼多くは今日に大安堵仕候ゟ前途大興起
ゟ目的更に相窺はれ不申尤春來德川氏ゟ頭面を擊挫き候は
大政一新におゐて不得止ゟ一條理にゟ是而已にゟ
大政一新は相濟候ものと相心得候ゟは天下億萬蒼生ゟ大罪人に政府は相
成申候前途ゟ目的相窺はれすと申候も天下ゟ諸侯も自分々々は兎も角も
其藩々々に於ては功名ゟ念勃々にゟ諸藩擧ゟ賞論ゟ事而已ゟ外は議論も
無之其上舊幕ゟ時よりも自然と驕氣は相募り藩力を以我儘等相應に
朝廷へ申立名義と歟名分と歟喋々申候も多くは聲而已に成行宇内ゟ大勢
を察し
皇國をして萬世維持仕候なと申邊ゟ所作ぶりは毫も相見不申唯々己に利
を引候樣ゟ風習に相移り却ゟ人の非は探り人ゟ能は妬み人の惡は怒り元
來日本ゟ人規模狹少と申處も可有之候得共全其而已にも無之大道ゟ衰た

る處も可有之第一大政官に於ては肝要なる會計ニ目的も今に相立不申是亦今日ニ委にゐは日本も大政官も會計にゐつぶされ候樣相成可申給料等の事に仕候ゐも所謂無算こと申候ものにゐも有之候歟逐々京都本官へも申越置候得とも元來今日ニ處にゐ所詮六ケ敷去とて此儘に打置候ときは唯々我身體ニ腐敗を待候も同樣にゐ終には骨に及ひ不可起ニ病症と相成は必然と奉存候月給ニ定にゐも小吏ニ困窮不云して可也と被存候ものゝ大體總ゐ上をへらし下を益に基不申候ゐは永久無覺束如此事にゐは天下ニ風俗を一變候は所詮六ケ敷相考申候依ゐ益切迫に存込申候は軍務に於て大方略御一決に相成先函館ニ一條御平定に至候はゝ海陸ニ處於朝廷稍御備被爲立唯偏に

朝廷ニ御力を以主として兵力を以韓地釜山附港を被爲開度是元より物產金銀ニ利益は有之間敷却ゐ御損失とは奉存候得共

皇國ニ大方向を相立億萬生ニ眼を內外に一變仕海陸ニ諸技藝等をして實着に走らしめ他日

皇國をして興起せしめ萬世に維持仕候處此外に別策は有之間敷禾蝦夷地を不能開して他へ手を出候等ニ說も有之候得とも是則一を知て十を不知ニ說にゐ蝦夷ニ事は此後不失順序唯

朝廷に而已蝦夷ニ利を御貪り無之候得はいか樣とも手段は相立可申韓地の事は

皇國ニ御國體相立候處を以今日ニ宇內ニ條理を推候譯にゐ東海に光輝を生し候はこゝに始り候事と愚考仕候若し干戈を相交候ときは必急迫に不致凡年々ニ入を定め一地步を占め候上は得と後來の掠了を立其力ニ可續ものを以無倦怠盡力仕候ときは必兩三年を不出して天地大一變實行相擧り萬世不拔ニ

皇基彌相すわり可申人生如朝露年光疾似矢所詮此儘にゐは五年や十年間に何ニ目的も相立申間敷於今日無窮ニ方向を相開き置候はゝ寸步ニ報酬

歟と奉存候或は又豐公ニ故智なとゝ論するものもあらん歟是又時と勢とを不知獨豐公を知る而已にゐ形ち聊豐公に似るものありと雖も其實豐公に異る事十に八九と贅言不仕尚御熟慮ニ上御勇決奉願度書餘緩々御談可申上候得共大略一應先以申上置候事

其節には驥尾に隨ひ聊微力を相盡度奉願候以上

大邨先生　　準一郎

（大村益次郎）

（此書は月日を闕くも明治二年正月上旬の頃に贈りしものなるべし）

一一　廣澤兵助宛書翰　明治二年正月上旬

（大津は大津四郎右衛門坪井は坪井惣右衛門）

亂筆御推讀可被下候乍失敬大津坪井二翁へも可然御致意奉願候以上

先以御壯榮に御精勤奉大賀候

一箱館平定ニ策もあらかじめ當月中には其實行相立候廟算に御坐候處何分にも軍艦ニ事約束相違仕今以相揃不申遷延仕候内には自然と奥羽諸藩ニ人心も又々動搖仕候都合に付甚以心急き申候最早一兩日中にも盡相揃候歟と相考申候漸製錬艦も受取申候に付つまり不相揃候得は不得止進軍一時に平定いたし候都合に御坐候來月中には前策通り相運可申歟兎角延勝に相成候には困り申候于時奥州青森山田市之允方より度々書翰も差越余程金子に相問罷居申候由老兄へも度々申上候樣子元來昨秋北地出張に付

朝廷より一萬金相下り候處其趣御國へ不相通候に付於御國御拂出六つケ敷依ゐ一人殘し置候由候處其後何たる左右も無之余程困窮仕候由爰元にゐ逐々諸藩拜借等も不都合不少且御國などは諸藩よりも余計に相成居頃日は爲其規則嚴重にゐ此上容易に拜借ニ都合も出來不申どふ歟老兄方より右ニ一條に付於御地被仰建も有之候由ニ處員數ニ事等は更に不相分於御國相違ニ事は有之間敷候得共諸藩ニ内にも曖昧ニ事にゐ拜借仕其跡にゐ軍務會計二官等にも甚迷惑仕候事不少由にゐ於規則至極六つケ敷邊も

有之大村なども尤苦心仕居申候今度駒井政之進も出浮仕居段々苦情申立候得ども只今之都合にゐは於當地如何とも難仕依ゐ此度弘中作之進急々御地罷登り申候に付

朝廷へ御申立に相成候替せ之分直に此仁へ御渡し被下候樣仕度段駒井よりも申出精々相頼申候に付被仰合御周旋被下候ゐ何卒作之進へ御拂渡被仰付早々青森へ罷越候樣御差圖有之度奉存候事

一曾ゐ申上置候御屋敷之處漸姫路邸御拜領に相成且々御住居之相とゝのひ候丈けに手入爲致申候兵隊入置居候に付言語道斷に內向き相こわしたゝみ立具等も一々相破り込り入候次第に御坐候當時議事所と相成居候處は御主殿と歟何と歟相唱へ舊幕より婦人を引受け候處にゐ余程普請等も丁寧にゐ且此節手入等も有之至極美麗に御坐候得共差向き受け取候譯に至り不申候別紙圖面御送り申上候間爲備被

御覽思食も被爲在候はゝ早々被仰越可被下候今一ヶ所之別邸は未何たる御沙汰も無之此邸も五六藩之迫り合にて甚込り入申候處漸入手先は右申上度得御意申候其中時下別ゐ御自愛第一に奉存候匆々頓首拜

先安心仕候

正月（以下欠）

廣澤老人

（此書は木戸孝允が明治二年正月上旬に廣澤兵助に贈りしものなり）

一二　三條實美、岩倉具視宛書翰

明治二年二月朔日

謹啓先以兩閣下益御機嫌克御參仕御盡誠爲

皇家恐悅至極に奉存上候東京も都合御靜謐乍恐御安慮被爲遊候樣奉存候一箱館進發之都合兎角約束齟齬仕今以軍艦相揃ひ不申甚及遷延候に付誠に心急き候得共如何とも難仕日々品海到着を相待申候十日前に相揃候はゝ必當月中には平定に至り可申と奉存候逐々賊艦も爲風波破壞仕候由彼地も度々大風波有之候樣子難船は賊艦而已と申事も無之事に御座候間遷

延仕候も亦天乎と奉存候得共此余延引に相成候ゟは不相濟候間不日如何
樣とも手段相立候都合に付必御懸慮不被爲遊候樣奉存上候
一先便言上奉り候月給論は何とそ速に御一定被爲遊度只今之次第にゟは
大政一新も只月給而已に相成申候五等官以上にゟ百幾十萬金と申樣に相
成申候何卒上を削り下を御增被爲成候御詮議被仰付度八九等之邊廿兩廿
五兩は賜わり不申ゟは暮方六つケ敷また下等之者丈け自然廉恥も薄き譯
に御座候間無理之御遣方有之賄賂にゟもむさぼり候節嚴重に被仰付候は
御仁慮に相反し候事歟と奉存候總ゟ下を增し上をへらし候之御主意徹下
仕候樣有之度奉存上候
一曾ゟ內々言上仕候建言一條も發上に至り昨春來之微志聊相達し雀躍之
至に奉存候名實法度相舉り候は一朝一夕御六ケ敷と奉存候大綱之其名一
旦相立候上は其目は得と被爲盡御詮議萬世不朽之御規則被爲定度奉存候
名分を相正し

皇基之相定り候處此外は無之付ゟは
御東幸之上大小諸藩同意同論を以數十藩も建言相成候はゝ大好機をまた
相成し候と冥々に盡力仕已に三兩藩は合論に至申候土老公にも先日來段
々御議論仕候處大悟彌御決心にゟ實に感心仕候其中に於西京御建言之次
第も相聞別ゟ御得意と被相察候已に箱館へ向け艦一條に付ゟも舊幕十年
前之勢に御座候得は如此之不都合は無御座於于此は赧顏之次第不少只々
奉恐縮候
一過日も申上候通征韓之一條得と御高案之上御勇決奉願度征韓と申候ゟ
も只初發より干戈を以相征し候譯にゟは無御座今日
皇國御國是と相定り候處を以宇內之條理を被爲推候御儀是に相戻り候と
きは直に以干戈御征伐被爲遊候ゟ至當至極之事と奉存候元來大政御一新
之御一新たる所以は
皇國を御維持被爲遊ゟこそ御名實相立譯に御座候處可慨嘆は宇內之大勢

に對し候時は
皇國之急は昨年よりも今年に相迫り居申候處上下只目前之平定に而已安
堵仕前途大興起之目的は更に被相窺不申去春來德川氏之頭面を擊挫いた
し候は御一新において不得已之一條理にゟ只々是而已にゟ御一新者相濟
候ものと相成候ゟは實に政府は天下億萬蒼生之大罪人と相成申候前途之
目的不相立と申上候も世間多くは賞論而已被相行諸藩も舊幕之時より驕
氣は大に增長し名義と歟名分と歟申すも多くは聲而已に成果藩力を以相
應に我儘に
朝廷に申立御一新之御主意を奉體
皇國をして萬世に維持仕候なとゝ申所作ぶりは甚少く多くは只己れに利
を引候事而已にゟ此儘にゟは四方小幕府之相集り候樣之姿と相成決ゟ興
起之基は相立不申是等之處も
御東幸之上にゟ則名分相立候處を以御處置之御都合も可被爲在候得共是
亦御實を擧け候に至つては必一時に難被行依ゟ彌征韓之儀御一決相成箱
館稍平定仕上は
朝廷之御備早々御手を被爲着只偏に
朝廷之御力を以韓地釜山府へ一港を被爲開度是元より物產金銀等之御利
益は有之間敷却ゟ御損失とは奉存候得共
皇國之大方向を相立億萬蒼生之眼をして內外に一變仕海陸軍之諸技藝等
實着に馳せしめ他日
皇國をして大興起し萬世に維持仕候處外に別策は有之間敷未た蝦夷地を
不能開して他に手を出し候等之世論も可有之候得とも是則一を知て十を
不知蝦夷之事此後不失順序只
朝廷に而已蝦夷之利を御貪り無之候得はいか樣とも手段は相立可申又豐
公之故智などと論じ候ものも可有之是則時と勢とを不知獨豐公を知る而
已にて形ち聊豐公に似たるものありと雖其實豐公に異なること十に八九

別に贅言不仕元來

皇國今日之人情規模尤狹小只人之非を探り人之能を妬み人之惡を怒り專ら内に而已眼を着け宇内之大勢實に我

皇國に急なるを不知此姿にゐ四方暫時にゐも無事なるときは種々之變態を生し人々益惑ひ可申韓國へ手を下し一旦干戈に至り候とも必急迫に不致一地歩を占め候上は凡一年之入を定め後來之掠了を立其力之可續ものを以て無倦怠盡力仕候ときは必兩三年を不出天地大一變之實行相顯れ萬世不拔之

皇基彌相すわり可申人生如朝露年光疾似矢所詮此まゝにゐは五年十年間何之目的も相立申間敷於于此無窮に方向を相開き置候ゐ今日之者寸歩之報酬歟と奉存不取敢尚又奉言上候已に韓國之使節之事被仰出候歟之由奉窺候付ゐは前途之御大事御一決之上被仰付度偏に奉懇願候先は右言上仕度亂毫を奉捧呈候誠惶々々頓首百拜

二月朔日

條公
岩公　兩閣下

（三條實美
岩倉具視）

孝　允
敬白

一三　大木喬任宛書翰　明治二年二月六日

亂筆高恕

拜啓　御清榮奉大賀候さては一應得と御相談仕且御高慮をも奉窺置度事件御座候に付過日鳥渡參上仕見候處御外出中に付取引申候其間に御間隙之折を相窺ひ參上仕度奉存候其中自然三兩日間に御參

朝にゐも被爲在候得ば其節拜青可申上と奉存候御樣子御窺旁奉呈候別ゐ近來御多務中に付必々無御用捨被仰聞可被遣候弟はいか樣とも差繰相成申候間御都合に隨ひ申候是又於公事辨なる次第に御座候爲其匆々頓首拜

木　戸

二月六日

（大木は大木喬任）

大木先生

一四　大木喬任宛書翰　明治二年二月七日

拝啓昨日は御答書被成下候處折柄外出中にゐ御返事も不申上奉恐入候則明夕參堂可申上候何も拝青之節と申縮候匆々頓首九拝

二月七日

尚々烏渡相窺申候上野の花頃日追々開き候よし之處番兵堅く門をとちて入るを不許之よし都人且近傍之ものども余程失望之樣子近傍は花時分には一賑ひとも相成候よし勝手に門を開て御見せ有之候ゐ可然歟に愚考仕候彼所は軍務にゐ管轄に相成候歟と相考申候得共自然東京府之御締り歟とも存し奉り候間乍序相窺申候敬白

（民平は大木喬任）

民平先生

準一

一五　大木喬任宛書翰　明治二年二月八日

朶雲奉拝誦候決ゐ一日之遅速は無御座候間明夕登門可仕候い曲拝青之上と申縮候眞之御答まで匆々頓首奉復

二月八日

大木盟臺拝復

木戸

（大木は大木喬任）

一六　林良輔宛書翰　明治二年二月八日

亂筆高恕

去月廿四日の朶雲過る二日相達し奉拝誦候以先君上益々御機嫌能御座被爲遊候段御互恐悦至極に奉存候將又老臺今般御清榮御上京被爲成候由大賀此事に奉存候二に野弟碌々消光仕候間乍憚御放慮奉願候頓に歸京可仕之都合に御座候處御當地至ゐ御無人にゐ交代參著無之ゐは御許容も相成兼其内不圖御用等も出來種々の關係にゐ甚困窮

仕候午去

君上御誠意御貫徹之御蔭にゐ當年も東京にゐ迎陽仕縱横滿城を徘徊仕候も實に如夢こゝち仕候昨冬來東北御處致一條に就ゐも總ゐ思ひきやの事而已出頭にも難盡事計りにて御座候不日拜青の上可申上候且又御沙汰の如く少々奇書畫も相求め申候いづれ其節備高覽可申候先は一應之御禮旁奉捧呈候其中時下御自玉爲國家第一の御事に奉存候草々奉復

二月八日

尙々來原書狀慥に落掌仕候御手數の程奉恐入候敬白

二木老臺拜復　（來原は木戸孝允の實妹來原ハル子なり）（二木は林良輔）

干令狂生

一七　大久保利通宛書翰

明治二年二月八日

亂筆高恕

拜啓先以

御清榮に引つゝき不容易御忠勤大賀無此上奉存候東京も都合御靜謐に御坐候間御安慮奉祈候さては曾て御内談仕候大名分を正し候之一大事件逐々不一形御盡力にゐ終に御建言之御運ひに至り生來之一念御陰を以相達雀躍之至に奉存候萬世不朽之皇基從是益確乎と相立可申と奉存候尤肝要にゐ緩急順序之料理卽興廢に相係り候至重至大之事と奉存候尙乍此上御盡誠只々奉祈念候

一　奥羽之民政漸々難澁之件出來其上各藩逐々欲念發起轉封等之事をいとひ種々之手段をいたし困り申候乍去一藩其謀を遂け候時は忽ち一統へ相響き申候間押し强く精々油斷は不仕樣いたし申候庄内南部之間は事に寄り申候と必一揆は相起り可申歟と被相察申候其始めを萬一之節は相挫き候事肝要にゐ自然も失處致候ゐは忽ち處々方々へ波及仕候に付爲念豫め用意は仕置申候至御煩慮候ほとの義は有之間敷と奉存候得共一應申上置候事

一　會津降伏人御處致之邊も最前之算當とは大に相違仕殊之外多人數に
ゟ一萬三四千餘相增し申候依ゟ初に相窺候人數と相合し此後御取扱之邊
得と軍務官と相談し別に好手段も無御坐候に付先便相窺候邊に豫め目的
を相立取調らへ候處一日は一日と御入用も不大形且其上降伏人心居合も
自然と疑惑を生し彼是往々之御爲め不可然邊も被相察申候間御評議之上
斷然先便御窺之通に御決定相成早速其運仕候間可然被仰上可被下候三萬
石之處は最前御決定之事にゟ其後一萬四五千人相增し候事に付外に於奥
州九萬石御當てかひ相成候都合にゟ以上十二萬石と相成申候其内九萬石
は蝦夷地開拓之目的相立候上は
朝廷へ御引揚け相成候都合に御坐候蝦夷地之方も段々見込も御坐候に付
九萬石も長く御當てかひには及ひ申間敷と奉存候是は拜青ならては盡き
不申候

一　箱館征伐も軍艦揃ひ兼不圖遷延に至り申候最早相揃候に付不日に進
發之都合に御坐候今日まて延引仕候事に付十四五日之遲速は無御坐候間
二月之節を過き候ゟ相發し候譯に決し申候

一　御東幸彌三月には
御發輦御治定之御事に御坐候哉此節之御達にゟは又々陸路
御通輦と申御事に御坐候處乍恐左候ゟは御親恤たの萬民之艱苦を被爲厭
候なとのと申候ゟも只々御沙汰面而已に成行御實行とは大に相違付候譯
にゟ決ゟ人心感服は仕間敷殊に此度は諸侯も盡東下に付候ゟは不容易事
と存先達ゟ凡人數張り供方等之事も詮義爲致掠了を定め西京へ相窺置申
候何分にも此度は
御艦に被爲召度奉願上候事にゟ御坐候乍去昨秋之事を想像仕候ゟは定ゟ
種々之頑說不少事と奉存候依ゟ東京於軍務官三四艦相揃へ凡
御發輦之御日合を奉窺候ゟ伊勢海へ御迎ひに突然差出イ勢海志摩之間に
ゟ俄に被爲召候御都合に極々密々に相計り置候ゟはいかゝに御坐候哉東

海道は東海道を
御通輩ニ御都合にゟ御用意は相成居候ゟ不苦事と奉存候何分にも乍恐可
相成は御艦に被爲召候御義只管奉祈念候思食ニ邊御内密に相公方へも被
仰上何分ニ義早々御一答奉仰候百萬一も不得止ニ御都合に御座候はゝ此
度は極々御輕裝にゟ木曾
御通輩可然樣奉存上候吳々も御艦ニ義第一御一策と奉存上候
老臺にも不容易御苦慮ニ御事と奉想像候
一　弟も一應歸京仕度と奉存度々議定卿方へも申上候得共交代ニもの不
參てはと決ゟ御許容無之後藤氏不日參著と申事に御坐候間日々相待候得
とも更に何たる左右も無御坐また頃日承り候得は後藤大隈兩氏道中より
御召歸しと歟申事と有之大木氏は始終東京府へ出勤詰にゟ御坐候間弟只
獨勤候ゟ日々に御用も出來不圖關係而已多く相成り甚困窮仕腰懸けにゟ
日々消光仕居申候是非々々

（相公は岩倉具視）
（後藤は後藤象二郎）
（大隈は大隈重信大木は大木喬任）

御東幸までには一應歸京仕度何卒御憐察を垂れ玉はり候ゟ一旦足ニ拔か
れ候樣御盡力奉願上候何分にも替りニ人參著無御坐ゟは御許容決ゟ無之
勢甚以困迫仕居申候吳々宜敷奉願候
先は右相寬不取敢亂筆を奉捧呈候其中時下　御自玉邦家ニ御爲め專一に
奉存候匆々頓首九拜
二月八日
尙彼御建白論何卒於東京も
御着輩ニ上は同一ニ建白有之度と冥々に盡力仕見候處不圖相應するも
の不少於于此何卒不拔ニ
御基礎益相据り東海に光輝從是相生し候樣永遠ニ御處致被爲在度只々
奉祈願候敬白

甲東老盟臺御秘拆　　孝允

（甲東は大久保利通）

一八　大村益次郎宛書翰　明治二年二月八日

一當春
御東幸之節は必々御艦と奉存候處元來御東幸に付ゐは滿京俗論沸騰殊に
艦論に付候ゐは一向合點の不入もの多き故歟三條公の御書中にも辨事へ
申參り候にも無余儀御陸路と申事有之申候付ゐは急速艦御求めには不及
樣にも被相考申候せめてイ勢から參州までなりとも御召に相成候はゝ一
段之事と奉存候爰元にゐの所致いかゝ之ものにゐ御坐候哉イ勢參州まで
位ならいか樣の艦にゐも御渡海相成可申可相成は此度は艦を奉願候譯に
御坐候得共如何とも難致是又御見込之邊相窺度奉存候右不取敢得御意申
候匆々頓首拜

二月八日　準一郎

益次郎先生

（益次郎は大村益次郎）

○一九　岩倉具視宛書翰　明治二年二月九日

大亂筆を捧呈奉恐入候御一覽後御火中偏奉願上候敬白
謹ゐ奉言上候今般土地人民返上之建言に相至り於于此大義名分彌正明
皇基益御確立積年之一念無此上難有事と奉存候依ゐ何分にも
御東幸之上は屹度此名丈けは於
朝廷御占め被爲遊御處置之次第緩急順序御興廢に相係り候事と奉存候此
處いかにも御肝要なる御儀にゐ當を被爲得候ときは東洋に光輝を生し候
はこゝに基き可申自然と當を被爲失候ときは前途益縮小終に宇内に御卓
立と申事は萬々無覺束奉存上候乍恐得と御賢慮を被爲廻候御儀申上るも
疎之至と奉存候曾ゐ先便奉言上候朝鮮之一條は一入御熟慮奉仰候
皇國内總ゐ實事之相擧り數百年之惡習を一洗し大方向を相定め候は吳々
も此外には有之間敷歟と奉存候御折も被爲在候はゝ小臣準一郎之多年之
微意に御座候間乍恐閑叟公へ一應御密議被成下度奉仰願候（閑叟公は此度之建言御同意之邊）

（閑叟は鍋島齊正）

（大久保は大久保利通）

奉窺居候御先見眞に可被爲在歟と奉存候此念兎角忘失難仕尙言上仕候誠惶々々頓首百拜

二月九日

再敬白御

東幸前一應歸京仕度交代人御下し無之故獨勤に付いか樣申上候ゟも御許容不被爲在先月中旬より日々參著而已相待申候委曲大久保にも申越置候間よろしく御聽取奉願上候歸京ゟ儀軍務と辨事にゟも種々議論有之甚困窮仕候何卒可然奉願上候

冥々に盡力仕見候處

御東幸ゟ上於關東も必數藩返上論建言仕候處も可有之と奉存候左候へは一入一好機會と相成申候せめて二三十藩も同意有之候と至極ゟ事と只管渴望仕居申候百拜

孝允

御密覽

（此書は宛名を略せるも岩倉具視に致せるものなり）

二〇　松浦竹四郎宛書翰

明治二年二月十日

亂筆高恕

拜啓過日は匆卒に御別れ申候間今一應拜青段々相寛奉存候處今朝御發程ゟ由承知仕甚遺憾に奉存候會津降伏人ゟ處も彌北地ゟ論一決仕候逐々軍務とも相談仕置候一萬余人を彼地に相移し候と申事中々容易に無御座候處先達來會津人潛居いたし居候面々にも面會咄得と

朝廷御旨趣も申聞候處一統意外に奮發仕居候樣に相察

朝廷ゟ御爲め粉骨盡力仕度存念にゟ主人重罪萬分ゟ一を相償度との志も相見へいかにも可憐ゟ至にゟ且又於

朝廷も今日に至り候ゟは天下御一視にゟ會人と雖も到處　皇國ゟ民に付此上は一人も其處を得候樣被爲遊度ゟ

思食は申上るまて無之御事に付何卒此機會に屹度御手も被爲盡度御事と

奉存候北地之邊は得と御敎諭をも蒙り度其内軍務官とも得と相談置申候間御地御用相濟次第早々御東下奉祈候其中御高按も被爲在候はゝ大村と弟之間へ御一書奉願候先は右申上度寸呈候其中時下御自重第一に奉存候匆々頓首拜

二月十日　準一郎

竹四郎先生御内拆

（竹四郎は松浦竹四郎）

二一　大木喬任宛書翰　明治二年二月十二日

亂筆高恕

拜啓橋市と申至極奇特なるものにゝ兼ゝ私方へも出入仕家産等もかへり見ず困窮者等を救助仕此願意も至當之事に御座候得ども私引受候事に御座なく候間東京府へ公然願出可然と申聞け候處一統惣括願ひ出候ほどの事も出來兼候心底に被相察申候間是又下情不得止譯歟と存私限り相窺申候に付公然申出候ゝ不苦事に御座候はゝ此段可申聞何分御示諭奉願候小事にゝは御座候得共窮民之一救助に付不取敢申上試候匆々頓首九拜

（橋市は橋本市藏なり）

二月十二日

尙々後藤氏も參着に候間不日彌上京仕候間御用も御座候はゝ無御腹臓奉願候拜

大木盟臺御直拆　木戸

（後藤象二郎）

（大木は大木喬任）

二二　大木喬任宛書翰　明治二年二月十二日

追啓

乍失敬奉追啓候他日御高按之趣一々拜聽且爲皇家御苦慮之邊相窺誠に以奉感佩候且又彼土地人民返上之論逐々相應建言仕候ものも有之歟に相聞へ於東京も御着輦之上は段々相願候向も有之候樣被相察申候此上御所致之次第實以

御興廢に相係り候事と乍不及苦慮仕候此上とも得と　御高按只々奉祈念候先日入尊覽置候一書自然御不用どもに御座候はゝ御返興奉願度然し强ゐ申上候儀にゐは無御座候間左樣思召可被下候匆々敬白

十二日夜

（此書は宛名署名を缺くも木戸孝允が明治二年二月十二日大木喬任に贈れるものなり）

二三　大木喬任宛書翰　明治二年二月十三日

華翰奉拜誦候御示之件々い曲奉畏候發途までにはいづれ相窺可申候先は御答まで匆々奉復

二月十三日　木戸

大木盟臺拜復

（大木喬任）

二四　齋藤新太郎宛書翰　明治二年二月十三日

亂筆高恕

（此書は自筆にあらず）

引つゝき御配慮をかけ奉り恐縮此事に御座候ばん丁弊邸明日より修覆營繕方爲仕候由に付加藤へにゐも乍御手數御通じ置可被下奉願候且又染井之方之代價も早々相渡し度可然御差圖可被下候今日は御光來如何强ゐ別段差向候事件は無御座候因州邸に御預け之會人兩名軍務官へ御渡し相成降伏連之總括を爲致候都合に決し申候此兩名ならは手もとゞき一統も安心之よしに相聞申候末藩保科家より之内願書熟覽仕候處いかにも尤至極何卒早々御許容有之度事と愚考仕候速に辨事へ公然差出に相成候方可然と奉存候先は爲其匆々頓首

二月十三日

尙々染井之一條先當分ゲヘイムにいづれへも奉願候弟孤劍游天之節時宜により一潛伏所を望み候譯にゐ則今日孤劍遊天は大望仕居候へともむやみに口出しも難出來場合有之見合居申候意味を解し吳候もの無之

候故弟も亦た吹聽不致ゑ所存に御座候此余は天に任せ申事により候へは
また山口ゑ山水も可然と内々相考へ居申候時勢も一寸ゑ先ゑ事難被申何
卒被申候樣に至り申と只々祈念仕候況一身ゑ事一歩ゑ先も中々被申不申
御降察可被下候呵々

新賢　兄御直拆　　準

（新は齋藤新太郎なり）

二五　大村益次郎宛書翰　明治二年二月十四日

朶雲奉拜誦候御示諭ゑ件々實に御懸念ゑ程御尤千萬に奉存候是非とも兩
條は一安堵に至り不申ゐは不相濟事と奉存候何分にも得と拜青相窺ひ可
申候さて又上國ゑ形勢稍承知仕候邊にゐも前途甚懸念ゑ儀不少廉々御高
按承り置不申ゐは不相成候東京御政事ゑ處も御見込ゑ邊御廉書に被成置
被下候樣奉願候會津人ゑ處は斷然存分に此上は御手を被下候方可然と奉
存候所詮相談評議も間には合ひ不申候三萬石ゑ土地ゑ處御見込如何に御
坐候哉海邊可然處御按しも御坐候はゝ是又御示し奉願上候先は一應ゑ御
答まで匆々頓首奉復

二月十四日　　木戸

大邨先生拜復

（大邨は大村益次郎）

二六　大村益次郎宛書翰　明治二年二月十六日

出立切迫に相成申候間今日は御高按も窺ひ置度と奉存參上仕候處御外出
中に付重ゐ參上可仕候何歟繁雜にゐ甚困窮仕候
一　昨日は東京府へ鳥渡罷越申候判事に鮫島誠藏と申仁有之昨年ゑ知已
にゐ一心に盡力仕眞に誠實篤行ゑ人物にゐ御坐候逐々罷出候樣申聞け置
候間一々無御用捨無御腹臓御示敎可被下先往は局々己の私を去互に其不
足は相助られ合不申ゐは不相成候處兎角東京は々々と申樣ゑ氣味に相成
申候間脇より氣が付候ゐも告る人無之樣相成候工合有之却ゐ

（鮫島誠藏は鮫島尙信）

朝廷ゟ御爲には不相成候尚御高按をも拜承可仕候

一　會津ゟ事は御存分に御着手可被成元より何も御同意に奉存候會津人にも逐々面會仕候處蝦夷地開拓ゟ一條には余程奮發に被相察申候人々其所を得捨たれたる所擧り御扶持も損とならず是より上策は有之間敷と奉存候

右□□人は格別人才とは見へ不申候得共□（國カ）家ゟ爲には誠實に盡し申候間自然御用ゟ節を事宜により此ものを以御駈引被成候ゟ可然と奉存候

一　京都ゟ樣子逐々承知仕候處殺氣も相應に有之とふ歟六七年前に少敷似より候形ち有之候と相見へ申候其に平田大學と歟申學者主上ゟ御前へ出講譯（マヽ）と歟申候由一日も遲しと思ひ候時節また次第にあとすだりをいたし候ゟは込り入候ものと相考申候技藝も技藝に候へとも國ゟ開け國の盛隆仕候は第一に人の心が開け候て方向が定り候より先なるものは無之方向不定ときは兎角百日ゟ說法尻（マヽ）一つに相成り安く九州邊長

（□は蝕字不明）
（一字塗抹不明或は國カ）
（平田大學は平田鐵胤か）

崎邊にも種々がだ々々やケ間敷よしに御坐候

一　兼々申上置候彼大一策凡御案しゟ邊一應得と相窺置度此事は何分にも一々筭を相定め置不申ゟは不相成事と奉存候何も御示諭御存分に奉願候余は拜青を奉期候敬白

二月十六日　　木　圭

大邨先生御直拆

（大邨は大村益次郎）

二七　大原重實宛金子覺書

明治二年二月二十七日

覺

一金七千貳百兩

一金札千貳百兩

但正金千兩ゟ辻にして

〆八千貳百兩

（木戸孝允自筆にあらず）

右之通り持せ申候慥に御落掌可被下候已上

二月二十七日　木戸準一郎

大原殿

（東京在勤辨事大原重實宛なるべし）

御執事

二八　鈴木直枝宛書翰　明治二年二月十七日

一東京學校事情之儀に付御申越承知仕候開成所英佛學校教師は洋人にゐ學生餘程多人數隨分不規則千萬併九月比より少々は規則相立候樣子に候得共格別替し事も無之候

一横濱佛學校兵部省より之取建にゐ大村先生仕置なり規則嚴重にゐ第一と存候乍併學校手狹にゐ土地も無之取調も不相成由いつれ浪花へ引越候積りと相見候得共急には運申間敷候

（大村先生は大村益次郎）

一海軍學校築地へ御開建相成候先達ゐ御國へも御達相成候大藩五人中藩四人宛諸生入塾被仰付尤當節出浮候藩は少く御國よりも被差出候筈に御坐候決ゐ此度は三田尻學校にゐ御撰擧可相成存候

一山尾は横須賀製鐵所造船局へ被差越候由御坐候造船學之人共は被差越度存候都會修行は世上風説とは相違左程益には相成間敷樣被考アヘセ（學業進み候ものは却ゐ御國の方可然併丸々不出ゐは田舍稽古に可相成候）デより學ひ候樣にゐは無益千萬に御座候

（山尾は山尾庸三）

一御國學生佛學多く素より生なとは英佛學いつれか得失は不相分候得共佛學流行之樣相成居申候何分當節の諸生は縮緬羽織絹袴と申風俗にて歎息に御坐候三隅市之助抔は大に勉强仕候箕作貞一郎塾は學風も宜敷樣相見申候其餘私閑暇之節御聞取奉願上候書外後便可申越其内御保護專一に存候謹言

（箕作貞一郎は箕作麟祥）

追二月十七日

尚々御歸萩之節久之進稽古事被就御氣度御賴仕候以上

（此書宛名署名を缺くも木戸孝允が鈴木直枝に贈れるものなるべし）

二九　南貞助宛書翰　明治二年二月十七日

天子來月上旬
御發輦也余に其已前歸京いたせとの
命ありしかして後藤參與新に參着東京ゟ事情未盡半途ゟ件も不少依ゑ參
與もまた議定にも兩三日延引いたすべきとの議ありしかし其輕重を論ず
るときは
天子御發輦前に歸京する事重し乍去兩三日ゟ事にゑ東京ゟ事も盡し
御發輦ゟ間にも合候得共無此上譯にゑ余ゟ私情を以ていたし候ときは一
日も速に足を擧け候方を只々相のぞみ候得ども政は密を貴びて疎をいと
ひ候と申事も有之兩三日ゟ事は勉强仕度と今日
宮中におゐて相決候に付ニューヨルクは彌廿日に出帆仕コスタリカまた
廿二三頃に來着直樣また出帆仕候と申事後藤參與よりも承知いたし同人

（後藤は後藤象二郎）

も横濱へ懸合可然との說に付御賴み申候處最早相尋樣更に無之との御答
其理於余不相解候へども此上は敢ゑ御賴み不申候以上

二月十七日夜　　木戸準一郎

南貞助樣

三〇　名和緩宛書翰　明治二年二月廿二日

先日は御乘艦の由にゑまた俄に一兩日御延引其中得拜靑候事と奉存候處
驅違殘念に奉存候御手紙は慥に落手拜見仕候御答も留守中不仕何も御容
赦可被下候此度の行は其中の一大御任故必々後役のものゝ逐々爲
皇國に御奉公仕候に爲前途其都合よろしき樣元より申上るも疎の至佛前
の說法に御座候得共御配慮の邊只管奉祈念候逐々時勢を想像仕候にさて
々々何も歟も六つケ敷善事といへども容易に難被行頃日西方の近情を承
り候ゑも建言の趣とは情實雲泥の相違も有之候樣子只々盡す處は百世の

後に目的を着け不申ゟは不相成何も其上からの事と竊に愚考仕候況や世間も亦然り乍此上得と御汲量御盡誠第一に奉存候山市子は少年中の英才遠より苦心仕候事も有之候歟に相察申候先達ゟ來御盡力のつゞきを以得と後來の事も御相談被成置度爲國家奉祈念候品川なども御陰にゟ余程大悟致し候事有之候と相覺誠に感服仕候國家之事は何も心切に冥々に盡力不仕ゟは必其成就は六つヶ敷古來中道にして瓦解に至り候は一の功名念より生じ候事不少候書不盡意何も奉期再會候其中時下別ゟ御自玉第一に奉存候匆々頓首

（山市は山田市之允にて山田顯義）

（品川は品川彌二郎）

二月廿二日

尙々品川彌二郎好男子今日までにも余程盡力有之申候山田品川幸北地に居り候故後來の事も御相談可被成候乍失敬兩氏へも可然御致意奉願候コスタリカ三四日中に出帆の由寺島より申來り候間近々必上京仕候何歟此余御用御座候はゝ被仰置候樣に奉存候以上

（寺島は寺島宗則）

（此書は宛名署名を缺くも木戸孝允が名和綏に贈りしものなり）

三一　前原彦太郎宛書翰

明治二年二月廿三日

亂筆御推覽可被下候別冊二御まぎれに呈上仕候御笑留可被下候

過日は朶雲御投與奉拜誦候彌御清適に御盡力奉大賀候爾後東京も別に相變候事無御坐候乎野屋佳平周旋之一條は其引受け〳〵へ申通置候如貴諭金札而已之引當にて取かゝり候事は甚以不可然と奉存候弟も頃日出立仕候事に付御示之邊も申殘置候箱館は其後逐々挫折之趣も相聞へ申候乍去殘り居候ものは全孤守之覺悟に被相察申候彌來る三月朔日軍艦一同品川海揚碇之都合に御坐候いつれ三月中には必平定に可至と被存候逐々會人にも面會仕候處至今日候ゟはまた愍然たる情實も有之於朝廷も最早一統を仇視被爲遊候譯は無御坐に付人を遇し候之御扱にゟ無之ゟは不相成少々議論も有之申候得共蝦夷開墾之運ひに相成申候筆頭に

（平野屋佳平は平野屋嘉兵衛）

難盡邊も有之逐々御承知に可相成と奉存候
御發輦も彌來月七日より十日頃之間に御決定被爲在候由京都も當節肥後
藩根主と相成段々浪士を皷動し余程攘夷論など盛に有之隨分やヶ間敷趣
も有之候由に相聞へ申候前途如何着落可致哉實以御大事之譯と奉存候土
地人民返上論も逐々諸侯より出申候是とても其決末之處肝要なる事に御
坐候御高按之邊も御存分に御示教奉願度候先は御答旁奉呈候其中時下別
而御自玉爲邦家第一に奉存候匆々頓首拜復

二月廿三日　準一郎

彦太郎様拜復（前原彦太郎）

三二　大木喬任宛書翰　明治二年二月廿四日

拜啓昨日は突然參上仕御妨申上候上御馳走被仰付奉萬謝候さて今日承り
候得は吹上御庭拜見被仰付候處多人數入込候に付門番之不都合より老人
二人小兒二人踏たおされ終に死に至り候樣子何と愍然之至に御座候親子
之情を推察申候而は何とも氣の毒千萬之至に御座候何者之子歟親歟何卒
早々御詮議被仰付候而明日は御示し被下候樣奉願候後藤氏と弟と兩名に
而議政局へ御投じ被下候得別而難有奉存候爲其匆々頓首九拜

二月念四

尙々御都合第次第弟之方にもよろしく御座候昨日申上置候浪士取締
之事は何分にも早急に御手を被着度奉存候い曲後藤氏へも相談し置申
候間此上之邊は御相談可被成候樣奉願候以上

大木老臺　木戸

（後藤は後藤象二郎）
（大木は大木喬任）

三三　伊藤博文宛書翰　明治二年三月朔日

爾後彌御清適大賀此事に御座候さて一應上京不仕而は不相成次第にも屢
御催促有之漸只今着港仕候直樣浪華へ可出と愚考仕居申候可相成は鳥渡

拜青いたし度雨中別ゐ御苦勞之義に御座候得共御光來被下候得は無此上
仕合にゐ御座候先は爲其取急匆々頓首

三月朔日

尙々いよ〳〵御滿家御無事めて度奉存候周布金槌も不一形御厄害と奉
存候いづれ居申候哉鳥渡旅寓へ罷越候樣御傳へ奉願候以上

木戸

伊藤　樣　無事俄急

（伊藤は伊藤博文）

三四　中井弘藏宛書翰

明治二年三月八日

（大隈は大隈重信）

大取込大亂筆御推覽奉願候御東着之上は大隈氏へも可然御致意奉願
朶雲奉拜誦候彌御清適奉大賀候さては如貴諭京地も種々之議論沸騰實以
　候弟も近來尤大衰弱御□（垂カ）憐可被下候以上
不安事而已にゐ御座候節角大隈氏へ面會仕得と東西之情實も申陳高論を
も承得（マヽ）仕度と渴望罷居申候處行違ひ不得一面遺憾此事に御座候

一御基礎と申事は於弟は別に議論無之已に昨年
御誓約を被爲立堂上諸侯其數已に幾百決誓仕億兆へは
御宸翰を以御示し被爲在於今日別に御基礎と申事は有之間敷只此事之立
と不立に有之可申天地一變之御大變革に付元より議論如山位之事は有之
申候も當前之事と愚考仕候只於
廟堂百折不撓と申四字之外更に見込も手段も無御座候乍去於心は至誠至
忠にゐも性質頑陋之ものも亦不少依ゐ只其ものどもをまた誠意誠心を以
誘導いたし候事實に肝要至極と奉存候其誘導之工合におゐては得と全局
之形勢を視察し偏頗に不相成樣盡力無之ゐは益怒るものは怒り怨むもの
は怨み妬むものは妬む之弊增長始終自ら壞り候處へ落入
興國興起は却ゐ無覺束歟と竊に愚考仕歎息致し申候實に成否は誘導料理
之邊に係り候事不少候此度は種々と姦計を廻らし大に人氣を搖動いたし
御厄害を成し候に付ゐも枝葉に至り候ゐは一向迂遠より被欺候ものも不

少巨魁は却而只己ニ不平より姦計を以一時を惑亂し決而誠心を以盡し候事に無之姓名も世間へは大に秘し居候樣ニ心底可怨ニ事に御座候依而六七輩捕縛ニ次第に至り申候尙此上終に其頭は罪を鳴らし金皷を以御所致無之而は相成間敷乍去元より屈不屈ニ上ニ事に而御座候總而丁寧綿密に無之而は不相成候

一大隈氏初發よりも大に盡力ニ事に而御座候處何分にも邪蘇ニ御所致は速に何と歟判然無御座而は不相濟事と奉存候追々見込ニ相違より粗暴相働きしもの心事におゐて毫も私心より不出ことと雖も大典を犯し候ものは斷然と御所致御座なく而は決而後來ニ事百事必瓦解と奉存候乍去然る上は於

朝廷も曖昧ニ事件有之候而は始終人心ニ居合は甚六つヶ敷と奉存候何分にも至急に御所致被爲在度事件は邪蘇ニ一條也何卒大隈氏へも御論談有之度元より大隈氏疎は無之事に而佛前ニ說法と奉存候得共懸念ニ余任序

申上置候尙會計ニ一條も尤差向ニ大事件に而何事も此基不相立而は忽總瓦解に至り申候間吳々も此二件至急至迫ニ事と奉存候御實事ニ相擧り候邊只々千禱萬祈ニ至に奉存候

二件程克大隈氏へ御噺

一西郷山縣ニ一條得と岩卿へも申上候處速なる方旁都合よろしき邊も有之少々不條理歟は存不申候得共終に如別帋御達に相成申候間何卒大隈氏へも得と御熟談被下且宇和島侯始御一局ニ處可然奉願候右御達ニ次第に付外國官より御印鑑手形長崎神戸へ相廻り候樣御周旋奉願候可成丈け迅急を貴ひ申候且又諸藩ニ內又は宮堂上方御家來草莽ニものに而も誠實有志にして固陋ニものは逐々西洋其外へ被差越度少々御入費相かゝり候とも今日ニ事節義家ニ識見相開け候より政府ニ事相擧り候事は無之是も年々歲々相開け候に隨而人數も少く相成候故何分にも此處へは御心切に御手を被爲盡度奉存候先は乍亂筆御答申上度奉呈候其內時下別而御自玉

（西郷は西郷隆盛山縣は山縣有朋）

（宇和島侯は伊達宗城）

第一に奉存候匆々頓首拝復

三月八日晩

尚々

御東着之上は實に東京府之取締別而御大事之事に付元より拔りなき事と奉存候へ共後藤參與へも得と御噺可被下候其手都合は已に相定り居申候以上

（後藤は後藤象二郎）

（弘は中井弘毅）

弘　老　兄御内密御火中　允

三五　大木喬任宛書翰　明治二年三月九日

亂筆御推覽奉願候別冊三差出申候三府は可成丈け何事も一規則に相拜啓先以

成度ものと奉存候拜

御清榮に引つゝき御盡誠奉大賀候二に弟も漸三日夕上着仕候乍憚御放慮奉願候滯在中は不一形蒙御高意奉萬謝候京都之形勢は實に東京とは雲泥之相違而已兎角此まゝにては前途之處御氣遣申上候已に

御發輦前も種々之議論沸騰にて余程世間も動搖仕候是には大に元因有之却て其巨魁は現地には出合不申始終陰より指揮いたし申候天下之衆情は得と御汲分け無御座ては相濟不申候得共自然も政府之不決斷より尾大之弊を生し遂に不可束之次第と相成候ては所詮中興之御成業如何可有之哉と甚懸念仕候尤逐々御取調らへ相成漸々於爰元も御手を被爲着候御都合に御座候東京之處も至極御案じに御座候處現場之次第い曲條岩二卿を始言上仕候處誠に御安堵被爲游候

（條岩は三條實美岩倉具視）

御發輦前紛紜之沸騰を起し候巨魁連之ものども潛に逐々東京罷下候由付ては

御着輦之上訖度御手を被爲下候御都合も被爲在候御樣子に御座候得共尚又其まで之處一層御取締り相成居候樣更に老臺尚後藤氏まで申上置候樣

（後藤象二郎）

岩倉卿精々被仰付候間不取敢得御意申候何卒於于此訖度御取締無之ゐは
不相成と奉存候　老臺兼ゐ御高按ニ邊も得と言上仕置申候其中時下御自
玉邦家ニ爲肝要御儀と奉存候匆々頓首九拜

三月九日

（北島は北島秀朝鮫島は鮫島尙信）

尙々乍失敬御序ニ節北島鮫島兩兄へも可然御致意奉願候弟も兎角折々
不快にゐ烟水ニ念勃々にゐ御座候御推憐奉願候拜

民平老臺内密御直拆

準一郎

（民平は大木喬任）

三六　大村益次郎宛書翰　明治二年三月十日

大亂筆御推覽被下候ゐ然る後必御火中奉願候以上

先以　御清榮に引つゝき御盡誠奉大賀候弟も過三日夕無滯上着仕候御放
慮奉願候滯在中は不一形蒙御高情奉萬謝候さて京地ニ形情は東京と余程
相違仕已に

御發輦前も種々ニ議論沸騰余程ニ御手煩も不少爲其に差かゝり萬事盡凝
滯其元因は久留米と肥後大に關係ニ樣子にゐ浮浪を皷動し則今攘夷ニ議
を申立迂活ニものは大に爲其惑わされ候ものも不少隨ゐ
御發輦ニ事を疑惑を立宮堂上等方へ迫り建言いたし宮堂上方もまた爲其
に驅使せられ頻に奔走一時其混雜不容易漸にして一鎭定に至り申候却ゐ
指揮いたし候ものは陰に居ゐ人數も甚少く候得共其波及に至り候ゐは荷
擔ニものも大勢に相成申候終にまた此弊增長仕候ときは則尾大ニ風をな
し自然國勢不振而已ならず百事瓦解に至り可申久留米などニ罪不輕譯と
愚考仕候加るに平田派其驥尾に隨ひ大に皷動を相助け候由諸事如此樣に
ゐは所詮何事も六つヶ敷儀と奉存候且又
御輦着を窺ひ東京へ入込何歟一策を企候樣子にゐ浮浪巨魁連ニものも前
後段々出立仕候由御地御取締も逐々御手相立候事と奉存候得ども
御着輦ニ上は尤御大事ニ儀に付訖度乍此上嚴重に御取締有之候樣御差圖

只々奉祈候于時又此度整武隊中之もの河野龜太郎と申仁一應御地まで罷下り申候此人元來初發に山田市之允一同出陣可仕之處兩度之銃創にゐ出陣不得仕全癒にゐも無御坐由に候得共漸々快方之樣子に付相願候ゐ被差越候に御決定御沙汰相成候由余程好人物にゐ篤志之人に付何卒乍御面倒御世話被下何歟御官之御用にゐも承り彼地罷越候御都合とも有之候得は別ゐ當人も仕合可申候通例之御用は如何樣之儀被仰聞候とも一分丈けは必相勤可申と奉存候於弟も其篤志に感心仕候間爲公私不取敢一書申上候何卒可然御差圖奉願候先は爾他申上度儀海岳に御坐候得共夜已に四更讓後便申候其中時下御自玉第一に奉存候匆々頓首拜

（山田市之允は山田顯義）

（櫻井は櫻井直養）

三月十日夜

尚々御取締之儀は何卒十分に御駈け引奉願候乍失敬櫻井翁にも可然御致意奉願候實に御國も難有處は難有御坐候へ共また癖論如山口出しも被致ざる事不少甚浩歎仕候爲萬世殘念至極に御坐候然し是は御内密にゐ御坐候吳々其御含奉祈候拜

益　先　生御内密　　允

（益は大村益次郎）

三七　伊藤博文宛書翰

明治二年三月十一日

御火中

大亂筆御推讀可被下候必々猥りに御議論不可然候却ゐ大に害を成爲其に破れ候樣至り可申程克人之應に御應し置可被成候非上之說も大異論と申事如何哉と存候然し是も御内々にゐ御聞置可被下候爾後彌御清適奉賀候過日は不相替また御厄害に相成早晚々々御世話に預り萬謝奉り候さて御幅二艦より直に取歸り候よし其相とめ置申候其節御噺申候椿山之一幅御送り申候間御一笑可被下候上京仕見候へは東京とは情實余程相違已に

（井上は井上馨）

（椿山は椿山）

御發輦前種々之議論沸騰爲其に三五日は何も車どめと相成候ほどの由に

御座候且又卽今攘夷論などの議も甚增長昨年外國人參朝尙萬國に並立など丶申文言が余程不平之樣子にゐ種々樣々之書面等も世間流布いたし候其根元は尤久留米と肥後二藩にゐ煽動いたし平田學連なども相加はり其余は迂遠之浮浪指揮せられ候事に被相察申候久留米などは曾ゐ於馬關米賊をなし逐々船頭どもより申出海賊連御詮義之節脫走いたしまた備前邊にゐはたけ盜人をなし穢多に縛せられ候清水正人と歟申ものども巨魁にゐ其連三四輩有之尤此ものども大に四方八方を皷動いたし候由兄等を尤大姦など丶申成し書面等も頻に世間へ流し候由左候ゐ此もの此節大に久留米へ被用謀主と相成俟を促し仁和寺之宮を奉始堂々たる御方々を余程動し終に

御前にまで相進み候由且久留米には二十四五名之浪士を邸內へ相圍置不相濟ケ條不少いづれ何歟と御糺し無之ゐは相濟申間敷此節其余之同類浮浪二三名は捕縛に至り申候必竟己の不被用處より不平を起し大に害をなし候輩不少候諸藩にゐ久留米肥後二藩尤巨魁と相見申候些是等之大罪は鳴らし度ものにゐ御座候癸丑甲寅以來幕に媚從いたし天下之正氣をはゞみ候事擧ゐ不可數然るに今日尙不悟千載一時之御場合に至り朝意に戻り候而已ならず妨害を釀し候事不被數盡之次第にゐ實以可惡之至に御座候平田連も是に類し候もの不少と相聞へ申候然る彼輩己之大罪を鳴らさる丶は差置頻に書面等を世間へ流布し朝廷を罵り世間を惑亂させ人心を暗まし誠以憤懣之至に御座候○先日一歩御退き被成度段懇々御內話御座候處其後得と相考見候へは於弟も其方實に可然歟と內々相考申候上京後色々と耳に入候事有之申候故せめて顏にゐ樣子相窺候處頻に罵詈いたし候由にゐ邸內にゐも甚聽苦敷事不少且兄之御建白と歟何と歟申候ゐ樣々議論も有之候由丸に天地之變り候處へ只むやみに相解候は却ゐ害有之候とも益は無之其故成事も終に不成に至り候而已ならず朝威にも相係り候樣相成浩歎之至に御座候主裁之人有之候得ば其もの何

も判斷仕候に付不都合無之候得共今日之姿にゐは何も冥々に相盡しよらしむべしにゐ心を用ひ盡力不仕ゐは何事も瓦解に至り可申と奉存候素狂（素狂は山縣有朋）に此節上京是も彼之論は大不同意に被察申候弟も只々どうなる事歟存不申一人二人之力にゐ及ひ候事に無之何事も天運と答へ置申候其他世間にもやケ間敷事不少誰がどふ是がどふと申樣に相成候ゐは忽瓦解に至り可申と存候此邊は極密にゐ筆頭にも被盡不申候何卒乍此上御心を御用ひ被成候樣に内々存申候一歩退之論も實に妙歟と相考却ゐ前途之爲にも可然愚考仕候依ゐ岩卿へ左樣可申上置とは奉存候得共尚其中御案も御座候はゝ御申越可被下候内が如右有之候に付ゐは外より種々と申成候時は必内外相應じ意外之世間へぶさいくを内より仕出候樣にゐも實以不都合至極に付今日心を用ひ天時を窺ひ候もまた至當之好計歟と奉存候是は只々弟之極密にゐ申上候事に御座候間御一讀後は御滅可被下候何も極内々御含置可被下候先は爲其匆々頓首

三月十一日夜半

尚々田中兄へも外へも可然御致意奉願候以上

芳梅兄（芳梅は伊藤博文）　允（田中は田中光顯）

三八　北川清助宛書翰　明治二年三月十二日

亂筆高恕

彌御清榮奉大賀候さて昨年は御書翰被成下候處東京罷越居彼是齟齬仕候ゐ此節拜誦仕一向御答も不申上甚奉恐入候尚家人之事兼ゐ御願申上置候處御繁務之中態々御配慮被成下三人とも好人物にゐ誠に仕合申候旁御高意之程難有奉謝候世間之光景も日に變移仕此後將來之處益御大事と奉存候于時同樣之書被仰越候處同子も不幸にして昨秋越後にゐ病死いたし誠に以可憐之至に御座候折角寺島氏よりも段々賴越之趣有之候處右之次第にゐ如何とも仕がたく且又別府も參り居申候處前文之通之次第にゐ始終（寺島は寺島秋介）

齟齬今頃漸入手仕候樣ニ仕合にゟ甚不都合千萬に御座候得ども是又致し方無御座候此段失敬ニ至に奉存候得共御序ニ節寺島氏へ可然御致意奉願候先は一應ニ御禮旁不取敢奉呈候其中時下別ゟ御自玉第一に奉存候爲其匆々頓首

三月十二日

（兩秋元は秋元源太郎、同新藏は林勇藏）

尙々此品甚輕少ニ至に奉存候得共幸便故差上け申候御笑留を玉わり候はゝ幸甚ニ至に奉存候兩秋元林へ別包御家來よりにゟも御渡させ奉願候今一包は寺島氏へ奉願候敬白

寺島氏より弟ニ賴まれものは愚筆にゟ耻入候得共勘考仕相認見可申老兄より宜奉願候以上

（清介は北川清助）

清介　老兄御直拆　　準一郎

三九　大村益次郎宛書翰

明治二年三月十五日

大亂筆御推覽奉願候以上

（香川は香川敬三）

先以御清榮に御盡力奉大賀候過日一書奉呈候處未不相達事と奉存候今日香川御示しニ御書面上にゟは實に東京ニ事煩念至極に奉存候不一形御苦慮と奉遙察候二歩判と金札との事は於爰元も沸騰有之大に不安情實有之申候必竟彼長岡右京大膽不敵ニ所業有之候より相起り候事と相見へ申候段々是迄議論も有之候得共つゝまる處政府ニ罪難免と奉存候奉恐入候

（長岡右京は長岡護美）

（大隈八太郎は大隈重信）

其に付今般大隈八太郎と申仁會計ニ事引受け被　仰付候由にゟ此節東下仕候弟は此度は面會不仕候處修終ニ議論見込も有之候由何分にも先生へ御面會仕候ゟ東京ニ近情も逐一承知仕候方可然と岩倉卿へ申上卿より定ゟ大隈へも被　仰遣候御事と奉存候間右二件は今日ニ一大事にゟ殊に億兆へ相かゝわり候事に付則天下ニ興廢に御坐候間毫も無御腹臓御相談被爲成候ゟ十分に御盡し奉願候且又外國官ニ事も同人副知事も蒙り居專任ニ事に付御氣付被爲成候廉は御談じ可被下候營繕ニ事は左も可有之と實

に歎息ニ至に御坐候何分にも清廉潔直ニ仁兩三名御撰擧無之ゟは所詮此
弊は不相改候其上にゟ出入一定ニ御規則相立不申ゟは不相濟候此度ニ不
都合は爲後來屹度御糺しは有之度已に條公も御先着に相成大隈も東下い
たし候事に付諸件吳々も御十分に毫も無御容赦御示談被爲成候ゟ早々御
所致ニ邊只管奉希望候京地は諸官ニ事と事替り土臺ニ大勢大相違にゟ總
ゟニ混雜不少爲其に百事凝滯に至り申候云ゆる六七年前御國ニ議論もめ
ニ初發に似たる處有之申候何分にも政府確乎と被爲在候ゟ判然御所致無
之ゟは終に又右往左往にゟ御一新ニ功はまた西京ばかりにゟも水泡と相
成申候其他御國ニ事等內外推想仕候ゟは實に何とも苦心煩念に堪へ不申
候先は差急き右中上度奉呈候其中御自玉　邦家ニ御爲第一に奉存候匆々
頓首拜

三月十五日　允

益　先　生御內密

四〇　齋藤新太郎宛書翰　明治二年三月十五日

爾後彌御壯榮と奉大賀候誠に滯在中は日々不一形御高意に預り御禮難謝
盡奉存候さて上京仕見候得は東京ニ樣子大相違にゟ實に歎息ニ事のみに
ゟ御座候如此事にゟは終に前途如何可相成哉甚苦心仕候於御地も粗御嘶
仕候藩などは考へ通りよりも一入姦計を相廻らし世間惑亂いたし實に人
心ニ動搖不大形次第にゟ御座候大略は作間へ申越し置候間御承知可被下
候猥りに他へ御洩しは必々人を見ゟ御嘶し可然と奉存候此邊申上るも疎
ニ至に御座候へとも爲念申上候已に
御出輩前も不容易混雜にゟ御座候
一　版籍返上ニ事などにも思の外ニ議論有之驚入申候此事などは猥りに
御嘶し無之方可然また長州人などへも容易に御はなしは不宜世間ニ情實
には益おそろしく被思申候ものを聞ものに誠は有之申候

（東洋は齋藤篤信齋）

一　東洋先生始御滿家樣彌以御清安に可被成御座と奉大賀候此度は書狀不奉呈候間可然御致意乍失敬奉願候實に滯在中は不容易蒙御高意奉萬謝候

一　廉々御願仕置候事御多務央奉恐入候得共何もよろしく奉願上候御內話仕置候件々も御含置可被下候

一　別紙差上け申候間御密見被成下都合よく御はからひ奉願候是又一手段にゐ御座候いづれ表向は表向にゐ訖度御所致も無之ゐは不相濟と奉存候得共兎角其中には下を動し大に彼より人をまどわせ候には困り入申候今日ゑ際不容易譯に御座候處只々嫉妬又は怨怒より起り私意を以國事を害し候樣ゑ事のみ不少實に可惡ゑ至に御座候よろしく御都合に何も奉願候先は右申上度奉呈候其中時下別ゐ御自玉第一に奉存候匆々頓首

三月十五日

尙々何事も無御用捨御勘考ゑ上御含を以可然奉願候以上

（新太郎は齋藤新太郎）

新太郎樣極々御密拆　　允

四一　伊藤博文宛書翰

明治二年三月廿三日

亂筆高恕

（周布は周布公平）

過る廿日ゑ朶雲相達拜見仕候彌御清適大賀此事に奉存候周布子ゐ傳言云々と御示しに御座候處成程周布子へも粗傳言仕候得共其四五日前小島房吉と歟申仁にゐ東京より連歸り一應歸國仕兼ゐ御樣子も承知仕居候由に付同人へ內密書一封相托し差出候處御落手に相成候哉其事何とも御書中に無之に付甚懸念仕候如貴諭言路洞開採公ゑ叡旨において毫も御齟齬は不被爲在御事と奉存候得共元來御承知ゑ通全國ゑ病症を得と想察仕候ゐ配劑仕候邊肝要歟とも奉存候人心も恍惚といたし居候病人をいか程相助け度と思ひ左右より種々手を盡し良藥を服用爲致度と苦心いたし候ゐも己ゑ斃るゝは不知に只々藥と申候得は絕ゐ相

拒み候樣ニ病人に至候ゟは藥と不云して良藥を服用させ候次第可有之是則冥々に相盡し候處へ當り可申歟今日八九は藥を服用させらるゝニ人而已にゟ服用に骨折候もの一は如御存一二も無覺束成丈け病人と醫者と喧嘩ニ内に病人も死絶へ家も滅し候樣に至らぬ處只々奉祈念候弟も滿身腫物參朝も不得仕尤相苦み居申候頃日岩卿御下坂にゟ御療養被爲成定ゟ兄を も御招歟と遙察仕候御東行等ニ事は其上にゟ何と歟得と御決定に相成候ゟ可然歟と奉存候一書不相達候ゟは何も相分り兼候事に御座候得共愚意は曾ゟ御内話も有之候次第に付堂上方ニ御内にゟ御壯年ニ御方御地へ御一人御出張にゟ兄にも御輔け被成候ゟ一歩後より御盡力有之候はゝ却ゟ前途ニ爲にも且四方實事ニ擧り候方に付候ゟも又可然歟と奉存候然し是は中々紙筆に其意味難盡弟も達ゟ御すゝめ申候譯にゟも無御座候先は右御答旁匆々頓首拜復

三月廿三日

尙々本文得貴意候通何も岩卿へ御拜謁ニ上にゟ御決定必不遲と奉存候彼房吉なるものへ相托し候ゟ一書と一包み差出し候處相達候哉否ニ邊幸便に御示し奉願候一書に付候ゟは聊懸念仕候○高野山今以混雜此一事にゟも天下ニ事ニ不相擧思ひ遣られ候譯にゟ將來を推考仕候得は總ゟ浩歎而已ニ事にゟ御座候以上

（此書宛名署名を缺くも木戸孝允が伊藤博文に贈れるものなるべし）

四二　伊勢氏華宛書翰　明治二年三月廿四日

一昨日一書呈上仕置未御返答も不相窺候得どもいづれ御立まで御余日も無之事と奉察俄急に思ひ立今晩萬碧樓にゟ一泊仕明日は御府へ罷出申候乍御手數一兩日ニ寓宿御家來へ周旋被仰付置被下候樣奉賴候疲馬も一疋隨從仕居申候先は爲其匆々頓首拜

三月念四五字過　　松菊生

（小松は伊勢氏歟）

小松老臺

四三　廣澤兵助宛書翰　明治二年三月廿七日

先以

御壯榮に無御滯御供奉御東着被爲成候と大賀此事に奉存候爾後京地も別に相變り候事無御坐都合御靜謐に御坐候間御安慮可被成候乍去攘夷論は隨分盛ニ由にゐひそ々々頻に議論も有之候由元來其首唱は肥後にゐ其後清水正人等ニ如き輩種々浪士を煽動し終に一種ニ流弊を釀成し爲其世間も自然と疑惑を生し人心區々にゐ

朝廷の御主趣も徹下不仕逐々承り候得は余程御地へも波及仕候由に相聞へ申候御取締は訖度嚴密に被爲在度浮浪ニ策中に陷り萬機凝滯仕候樣相成候ゐは先年ニ覆轍に至り申候乍去また其而已に目着致ししやに構へ過候ゐも不宜此邊ニ御料理今日ニ一大急務に付不容易御高配と奉察候近來

（大久保利通）

東京へも手配りは仕候由に付御拔りは無之樣奉千禱候頃日大久保氏上着弟も不快にゐ日々出仕は不得仕候へとも同氏にも面會仕緩々談話も仕候處彼等ニ所致甚憤懣ニ樣子にゐ御坐候且同氏より直々承り候得は先頃

（二藩は山口鹿兒島なり）

勅使二藩へ御下向ニ砌肥後などには追討ニ

內勅などゝ申候ゐ國中大紛擾長崎ニミヲーは盡買ひ上け薩州へも間諜等出しいかに向疵があれは當りが早しと歟申候ゐも如此心を以世間を嫉妬心より惑亂させ候ゐは困り入候譯にゐ必竟爲

皇國浩歎ニ至に御座候轟とか申候仁も東下仕候由被面向長州などへ申候處と浮浪などへ說候處とは雲泥ニ相違にゐ終に何と云事歟相分り不申候今少しは

（轟は轟武兵衛にて照幡寬胤なるべし）

朝廷にも御威光相立不申ゐは不相成歟と奉存候何分にも東西ニ大勢大に相違仕候處有之諸有司ニ所憂も隨ゐ相違仕候氣味不少左候ゐは必修終ニ處無覺束候間自然ニ勢とは乍申高きより御一視被爲在候ゐ御駈け引無之

ゟは不相濟事と奉存候且又東京には種々ゟ派有之候ゟ他より承り見候得は意外ゟ響きと相成申候鳥渡たとへて申上候得は松浦竹四郎と云申仁有之惡人にゟは無之候得共至ゟ狹隘にゟ頻に有司等にゟもむやみに疑惑いたし丸ゟかたもなき事を何歟より大そふに申なし元より大村など取捨いたし彼の虛說を聞取候譯は少しも無御座候得共逐々松浦ゟ口より出相違事有之候などゝ申事も世間へ流布仕只管大村なども松浦ゟ事を用ひ候などゝ疑ひ候ものも起り候樣ゟ姿にゟ駈け引に甚工合有之候樣東京は被考申候一方聞にゟは時々間違は不少候佛前ゟ說法申上候は奉恐入候得共未た補議公方へ御力添被爲成候於于時は御一端歟とも奉存任筆申上候先は旁奉呈候乍失敬後藤大木へも可然御致意奉願候其中時下御自玉第一に奉存候匆々頓首拜

（大村益次郎）

（後藤象二郎大木喬任）

三月廿七日

尙々御出立ゟ頃御血色不十分樣奉存候間御氣遣申上候處漸々御快方に傳聞仕候間降念仕候弟もぐつ々病を養ひ申候中村氏も過日出立に相成十日前には東着に可相成と奉存候御序も御坐候はゝ中村大村二氏へ可然御一聲奉願候拜

（中村は中村誠一）

兵助は廣澤兵助）

兵助老兄御内拆

允

四四　内藤左兵衞宛書翰　明治二年四月一日

亂筆高恕

別符二通御屆け可被遣候奉願候

過日は御手紙御投與拜見仕候引つゝき御淸適に御盡力御屋敷御仕構事等も總ゟ御調に相成候由不容易御配慮と奉存候廣澤氏も頓に東着不日中村氏も東着に相成可申候間二氏に御相談に御座候はゝ何事も相運可申候御獨勤にゟ實に長々御苦心に御座候處此節は少しは御手も隙候御事と奉存候乍去此時勢に御遭遇御配慮等も亦求ゟ難得事に御座候間後日ゟ御一談

（廣澤兵助中村誠一）

には相成可申候先は御答旁眞に一書奉呈候其中時下御自玉專一に奉存候乍失敬大村新二氏なとへも可然御致意奉願候匆々頓首拜

四月一日

倘々小倉兩河庶子へも可然御一聲奉願候且又周布子は不案内之事御座候間御駈け引可被遣候奉願候以上

新一郎之書出先便延引仕候乍失禮御渡し可被遣候以上

左兵衛様御直拆　準一郎

（小倉は小倉右衛門介）
（兩河は河内宗一河野光太郎）
（周布公平）
（新一郎は井上新一郎）
（左兵衛は内藤左兵衛）

四五　作間正臣宛書翰

明治二年四月二日

亂筆高恕

彌御清榮に御盡力大賀此事に御座候さて頃日は別ゑ御多事不相替御勉勵と奉察候于時浮浪之徒頻に横行いたし候歟之由にゑ過日於東海御用狀を奪去り候と申風聞相承申候いかゞ之事歟と存申候過日大木氏へ一書差出

（大木喬任）

其後山中氏ゑ一書差出し其中には盟兄へ出し候書面も有之申候處彌相達候哉一應御調らべ乍御手數早急何分之儀御聞せ可被下候御頼み仕候只今飛脚出立大急に付眞之一書奉呈候爲其匆々頓首

（山中厳）

四月二日

倘々最初大木氏へ出し候ときは後藤へも一書出し申候以上

（後藤象二郎）

申上るも乍疎御内々にゑ早々御調可被下候奉頼候以上

栖夢　盟兄御内拆　干令生

（栖夢は作間正臣）

四六　岩倉具視宛書翰

明治二年四月三日

密呈

病中執筆亂毫之處偏に御了簡奉願候百拜

匆卒言上仕候ゑ甚奉恐入候得共逐々傳承仕候處

中宮御附之御女中にゑ若江と申す婦人には稀なる學者にゑ外國之事を憤

（若江は若江薫子）

り上書等も有之攘夷説尤盛に陳論ニ由爲其世間には婦人すら如此などゝ
只々深趣は不知して疑惑を生し候氣味不少様子に相聞へ申候如右大勢を
知らず世間までも動され候様にゐは乍恐
中宮御補佐隨ゐ終には
至尊御中興御成業ニ御妨如何と乍陰頻にまた煩念苦慮仕居候ものも不少
何卒右如若江婦人へは得と今日ニ
御主意を御説諭に相成眞以
叡旨を奉體乍恐御左右より　御高德ニ不相失様盡誠不仕ゐは不相成事に
ゐ御左右に
御主意を奉じ違ひ候もの有之候様にゐは百事萬々御六つケ敷御座候間訖
度今日ニ處を得心相成　宮中は一人ニ婦人にゐも心得違無之様被爲在度
奉存候付ゐは是等ニ婦人呉々も御説諭ニ御工夫被爲盡度只々奉仰願候大
に人心ニ向背に相かゝわり候事件に付不取敢後より相認尚又其儘を奉言
上候誠恐々々頓首百拜

四月三日

（此書宛名署名を闕くも木戸孝允が岩倉具視に致せるものなり）

四七　岩倉具視宛書翰　明治二年四月三日

密呈　御熟覽後御投火奉願候敬白
謹ゐ奉拜呈候先以御機嫌克御滯坂被爲遊恐賀此事に奉存上候乍恐準一郎
も不快にて家居保養得と世上ニ近況も承知不仕候得共兎角浮浪ニ徒種々
ニ疑惑説より大に世間ニ人心を鼓動爲致候等ニ事も不少哉に承知仕候已
に別紙建白も有之申候間奉入　尊覽候此建白ニ通りにも現地ニ處如何可
有之歟と奉存候一旦相集候ゐは自然又相散し候様ニ事有之候ゐは害ニ上に
害を加へ候様に相成り今以其毒散亂不仕至今日候ゐは最初二條ニ浪士等
を相解き候にも大に失所致居申候とふ歟其魁たるもの御詮義に相成歸る

べき處も居るべき處も無之多年國事に盡力仕候心得にて出國仕居候ものは當季御役に不相立とも且々其所を得候丈けゝ御所致相着き已來ゝ處は訖度府藩縣へも嚴律を被爲布爾後決ゝ浮浪ゝ徒不出樣に御手を被爲下度實に是までにても御沙汰而已にて少しも府藩縣へは徹下不仕候に付惣ゝ一日は一日より六つヶ敷相成候委にゝ前途ゝ事も推ゝ相知れ申候德川初政ゝときも一心寺と歟一月寺と歟明安寺と歟申ものを相建置候事なども不得已ゝ一策歟と想察仕候無主意にても有之間敷得と此邊ゝ御工夫乍恐被爲成置凡脩終ゝ御目的相立候て爲後來別ゝ可然樣奉存候今日太政官中にても且々用被立候ものゝ中には又舊幕時節用に相立候ものもなきにしもあらず今日太政官より見候ときは邪魔ゝ樣相考候もの又舊幕ゝ時節は大に邪魔に相成候ものも不少何分にも此徒且々得其所候樣御料理奉祈念候尙此ものどもの近狀は乍恐河村健藏と申候もの差出候に付御聽取奉願候金札論も逐々御承知被爲遊候通此節稍鎭定仕候何卒此義は御一決にゝ百二十兩内ゝ相場に被仰付候方必可然樣奉存上候且又諸藩ゝ雁金も屹度停止ゝ目的相立不申ゝは日々不可語歟ゝ大患に陷り候は目前にゝ誓ゝ御維持ゝ御大策は難相立と奉存候貨幣ゝ事一正仕候義實に一大急務に付乍此上偏に　御注意奉仰願候雁金ゝ義に付甚懸念仕候義も有之申候謹藏より御聽取是亦奉願上候先は差向き候事件不取敢奉言上候別紙類多くは東京より取歸候分にて御坐候　御熟覽ゝ上尙　御高慮奉祈候目前差向候事件にては無御坐候得共順々御手は不被爲下ゝは不相成事已而多く御坐候誠恐々々頓首百拜

四月三日

勤疾相認尤亂筆奉恐入候御推覽ゝ程奉御願候敬白

（此書宛名署名を闕くも木戸孝允が岩倉具視に贈れるものなり）

四八　田中不二麿宛書翰　明治二年四月五日

亂毫高恕

拜啓先以

御清榮に御上京奉大賀候過日浪華へ爲御保養御出浮に相成候御樣子ほのかに傳承仕拜青仕度と懇願仕巖谷生へも相賴置候ゟ御樣子奉窺居候處不圖得御左右雀躍此事に御座候殊に珍物御惠投御高意ゝ程奉萬謝候さて昨年は不一形蒙御高情無間御上京被爲成候御事と而已奉存候處爾後逐々承り御尋仕見候は、些御不快と歟ゝ御樣子にゟ御延引に相成候由相窺誠に御案仕居候處拜青相叶候次第早速參趨萬可奉窺と奉存候爲其先は匆々頓首九拜

（巖谷は巖谷修なり）

四月五日　木戸

田中老臺御直拆

（田中は田中不二麿）

四九　村田文庵宛書翰　明治二年四月六日

今日は彌

御壯榮に御出立奉大賀候さて先日來御懇切に度々御光來奉大謝候御立も御余日有之候事と而已相心得兎角取紛御無沙汰申上候內俄急に御立と相窺甚失敬而已申上候何も御容赦奉願候且又御願仕置候品多數にゟ如何にも奉恐入候得共別紙付立ゝ通御持せ申上候間よろしく奉願候今朝は客來等有之取紛大延引仕候先は御願まで奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候匆々頓首拜

四月六日

尙々此品千萬輕少ゝ至に御座候へ共差出申候間御笑留被下候へは無此上難有奉存候以上

郵田先生御直　木戸

（郵田は村田文庵なり）

五〇　作間正臣宛書翰　明治二年四月七日

大亂筆高恕

（槇村は槇村正直なり）

別紙相認め置候内御一書到來早速拜見仕見候へば槇村云々之御示しに付詮儀爲仕候處已に浪華へ參り候由に付此段可申越と相考居候所不圖槇村より相屆け不取敢拜見仕候彌御清適大賀此事に御座候乍御手數別紙御序に御とゞけ奉賴候先以御高諭之件々實に難有感泣此事に御座候兎角人之短は見へ安く候得とも我が非は一向不相分古今往々只其よりして却ゑ國家之爲に不相成事而已にゑ御座候乍此上毫厘も無御腹臓御見聞之儀は御存分に御忠告平に丸々奉願候醉後之不都合自分にも折節は醒ゑ後悔仕候事不少嘸々醜態之事而已にゑ有之候事と赧顔無此上已來は訖度心を用ひ可申候如御書翰定ゑ種々樣々之世論而已にゑ可有之何卒萬世に渉り公平正大之處を以御斷決被爲在度奉存候御高諭之通弟可成丈け緩々東下可仕と其用意仕種々豫防之策も相施し置候得ども何分昨今切迫御催促にゑ困窮此事に御座候精一倍遲緩論を相盡度と其而已にゑ御座候元來一應休息

相成候得は無此上と奉存候得ども不任心底御憐察可被下候先は一應御禮までに相呈申候吳々も乍此上無御腹臓御示教只管奉願候其中時下御自玉第一之御事に御座候匆々頓首拜復

四月七日

（栖夢は作間正臣）

栖夢老兄　内密御報

尙々何歟御聞及之事も御座候はゝ少しも無御用捨御洩し可被下候たとへ不意ゟ事とても相心得居候と大に心得にも相成隨ゑ聊酬國家度と奉存候之微意にも相叶候譯にゑ御座候必々御存分に御忠告可被下候此度之御一書師父と相心得拂涙再應敬讀仕候以上

干　令

五一　伊藤博文宛書翰

明治二年四月九日

大亂筆御推讀奉願候此人よりも崎陽之情實御聞取可被成候

（世外は井上馨）

彌御壯榮珍重此事に奉存候さては世外子より別紙到來引つゞき心配と被

察申候尤氣短かゆへ一入立腹に可有之と被相察申候崎陽も諸藩士國論に
ゐも無之に名々勝手に公論々々と申立候ゐ議論を起し候事は甚よろしか
らず此上世間ゑ有志と申ものも半五六年飛渡り候ゐ今日出顯いたし候に
付今日ゑ形勢に至り候其條理次第之あるを知らずむやみに付終に一定ゑ
事は有之間敷と被思申候氣付ゑ邊は不殘申越し置候進退論も月給論も巨
細ゑ事は存不申候得共愚存ゑ處是また申越候外國御交際に付候ゐゑ御取
扱振ゑ爰元にゐ得と巨細ゑ義は不相分其上當局にゐも無之乍去兎に角坂
庫ゑ處が根元にゐ横長箱は其末と先相成候譯に付氣脈は得と相通じ不申
ゐは不都合不少歟と奉存候付ゐは別紙も一應御覽被下合點ゑ入候樣御一
書御投じの都合可然と奉存候依ゐ束ゐ差出申候先は爲其相呈し候實に多
事にゐ甚困窮仕候匆々頓首

四月九日　　干　令

芳　梅　盟　兄御密拆

（芳梅は伊藤博文）

五二　伊藤博文宛書翰

明治二年四月十五日

過日來度々御來光奉多謝候始終失敬而已相盡し何も御容赦可被下候さて
は左ゑ件々何分御願仕候よろしく奉願候
一　耶蘇御處致に付御高案ゑ處實に可然樣奉存候着手ゑ都合御内話ゑ通
りに御認め置可被下候必々奉願候此事は尤關心申候吳々も御盡誠千禱萬
祈候
一　紀州ゑ書面是又無御失念鳥尾へ御託し鳥尾より御國へ相達候樣御計
らひ可被下候此外御國人ゑ一見いたし候ゐ役に立候樣ゑ書類は御配慮被
下候ゐ一々御送り可被下候願はくは此便りゑ方可然と奉存候
一　御多事ゑ中奉恐入候得共もし弟少々後れ候歟も難計候間左候へは兵
庫より上艦いたし候間必老兄御立後に二相成候とも不都合無之樣田中中島
諸兄へ厚く御賴置可被下候偏に奉願候先は右御願まで早々頓首

（鳥尾は鳥尾小彌太）

（田中は田中不二麿中島は中島佐衛なるべし）

四月十五日

尚々事により候と一人御東下頃先へ遣し候もの相願候歟も難計其節は
よろしく奉願候以上

（伊藤博文）　伊藤　盟兄　御内拝　　木戸

五三　田中不二麿宛書翰　明治二年四月十六日

病間執筆紛亂之處偏御了簡奉願候拝
拝啓爾後先以御清適に無御滞御東下と奉大賀候御地之近情如何に御坐候
哉煩念至極に奉存候夜白御盡誠之程奉遙察候岩卿も不日東下大久保も陪
（大久保利通）
行にゐ御座候政府御揃之上は屹度御基礎御確定其目的之相立候處を誓ひ
一二之世論に搖されぬ様有之度無左ゐは隨ゐ世間にも益狐疑仕候ゐ百年
相立候とも
朝威之不相立而已ならず瓦解之外致し方無御座吳々も御一定之事は貫徹
を誓ひ候事尤肝要歟と奉存候乍去其間に御基本堅固に無之ゐは誰れ々々
之論などと申様之事有之候様にゐ實に致し方無御座候於弟は逐々御下問
之件々は五條に被爲基候ゐ被仰出彌以御基礎を御固定被爲遊之御主意吳
々も可然歟と奉存候且又攘夷論に付候ゐ之
御書付も議事局にゐ議し候は不宜
叡慮にゐ被仰出候方いかにも徹下之工合可然樣に奉存候副知官事之一條
も懸論丈けは三東二卿へ言上仕候何卒乍此上御盡誠御存分に三東二卿へ
（三東は三條實美東久世通禧）
は被仰上機宜御料理千禱萬祈之至に奉存上候弟も頃日少々快方いづれ不
遠東下可仕と奉存候尚又御示教奉願置候其中時下御自玉爲
天下第一に奉存候匆々頓首九拝

四月十六日

（田中不二麿）　田中　先生　御密拝　　木戸

五四　岩倉具視宛書翰

明治二年四月十七日

御密覽

謹ゐ奉呈上候先以御機嫌克被爲居恐賀此事に奉存候率一郎義も過日下坂仕ボードインに診察を乞ひ候處療養に余程時日を盡し不申ゐは漸々增長終に不可復之容體に可至と先三七日も海水浴等可致など意外に申甚嚴重なる次第に御坐候得共曾ゐ御約束も申上置且逐々蒙　御沙汰候に付一應東下不仕ゐは難安奉存候間五七日丈け彼之說に隨ひ療養仕東下仕於東京尙療養相加可申と奉存候如此義言上仕千々萬々恐惶之至に奉存候得共遷延仕候義幾應にも奉恐入候間不顧恐申上置候何卒兼ゐ奉歎願候通然る上は此際之御用一先相濟候上は宿志之處御許容之義偏に奉願上候尙京攝之近情左に言上仕候至當之義は速に御手被爲下度奉存上候無左ゐは何事も只時日筆紙之費と而已にゐ更に寸益も無御坐と奉存候

御政府之密事所詮漏洩仕是は彼之論より出是は此之說より出るなどゝ申事不少隨ゐ官中他顧之念相生無理事にゐ御坐候間此間を御所致御料理被爲在候御事尤御肝要歟と乍恐奉存上候浮浪士などの說にも口實と仕候事は岩倉樣方も薩長之申候事故致し方無之薩長兵力有之候事故不及是非無余義事などゝ被仰出實に岩卿には其思召にて全攘夷之御論なとゝ申ふらし候徒も折節は有之又薩長之壯士ともは其端を窺ひ或は不滿を抱き候樣之氣味にゐ又は岩卿と云又は條卿と云種々樣々にて不足取事とは奉存候得共人心之終に惑亂仕候處も無根之事にゐ眞之小事よりも其基は相起り候事不少小事に可用心は則此際に有之候事歟と奉存候

一　金札論已に御布令被爲在候處其實行訖度相立不申ゐ差向き人心之居合に關係仕益

朝威相立不申隨ゐ百事瓦解仕　御沙汰一度出れば一度之疑惑をなし候樣に成行申候付ゐは浪華と京都は唇齒之勢に付浪華之人民安堵仕候へは忽京都へも相響き隨ゐ東京へも大に及し申候依ゐ阿州土州備前諸侯等へは

乍恐御誠心を以訖度御說諭被爲在迅速御國內に布令相成金札等浪華との取引聊も凝滯なき樣厚く御世話無之ゐは此三諸侯方は今日朝廷ゑ御重職に被爲居屢天下へは御布令有之候得ども御自國にゐは一向金札御取引無之天下ゑもの何以可信哉などゝ申居誠に此三國などは浪華に尤近く諸商人等ゑ取引も別ゐ多く其上朝廷ゑ御重職には有之候間

朝命御遵奉ゑ御實行差向此御方などより相擧り候事尤御急務と奉存候此節中西國雁金ゑ混雜不容易誠に以爲前途大懸念仕居候月々日々盛に相成候由嚴然御停止ゑ目的相立天下ゑ人民安堵仕候丈けゑ御所致無之ゐは此一事にても又不可束ゑ紛亂を生じ可申と奉存候其上此儘にゐは朝廷御會計ゑ目的は萬年相立候ゐも相立不申と奉存候

一　此度於京都逐々御取締有之候由ゑ處段々不容易事を相企居人心を惑亂仕不安事而已にゐ御坐候乍恐春來御所致向判然と無御坐候處より禍患益增長仕隨ゐ內顧ゑ念を諸官一統に相生じ無把握姿と相成申候京攝ゑ御取締は東京よりも訖度嚴重に被仰達度奉存候

一　昨年來神祇官大に所致を失し猥りに僧徒を相退け候樣ゑ次第に成行神佛混淆不致樣にとの御主意も只々廢佛の樣差響き府縣に於ても心得違ひ候處は猥りに寺を廢し候樣の儀も有之候由にて僧徒ゑ不平不大形隨ゐ種々ゑ不平連と相合し只其怨を政府へ相鳴らし無根ゑ說を唱へ疑惑を生し或は邪蘇と歟何と歟相唱大に天下ゑ諸寺院に布令等いたし檄ゑ傳はる所益疑惑を釀し甚以不穩而已ならず遠境避地は彌狐疑を生じ頑固に相成御政令益以不相屆樣成行誠に以不容易事と奉存候僧徒ゑ安堵仕候丈けゑ御沙汰は被爲在神佛混せぬ樣にとの丈けゑ御主意は徹下仕度事と奉存候何分にも此節僧徒ゑ混雜も一騷動にて大に人心に相障り申候於京都東西本願寺始め浪華にては同本願寺天王寺又は高野山などゝ諸宗逐々衆會候儀檄等を飛し僧徒を集め候樣ゑ事有之申候主として論する所は外夷と邪

蘇を防ぎ爲め護國論と號頻に主張仕候由幸當時諸府藩縣よりも東京罷居候事に付僧徒とも之安堵仕候丈け之御布令は迅速に被爲在且又從來僧徒之不行跡は訖度被爲戒候ゟ被仰出度奉存候元來佛法執心にゟ入佛門に候ものは無之爲口糊幼少之節入佛門候ものに付自然行跡等も不宜又情を矯候譯にゟ可憐事も不少必竟爲口糊僧になしゝなどゝ申事は御政事之不行屆儀に付是等は逐々訖度御規則不相立ゟは不相成事と奉存候

一　十津川郷再發之混雜にゟ是等之事も大に又人氣に相響き且浮浪を煽動し候一手傳と相成申候依ゟ奈良府之知事は堂上方にゟ訖度御鎭壓被成候御方尤可然と奉存候左候へは知事に御官轄被仰付候ゟ可然無左候へは別に陸軍將御官轄に相成可然參謀を被差添御規則嚴重に御取締被仰付度奉存候東園卿奈良府知事御斷被爲成候歟申儀有之候處御同方御人と成は不奉存候得共奈良府は御陵始靈地等も不少西京東京等に御坐候得ば別に高貴之御方も不少候故知事は誰にてもよろしく御坐候得共奈良府は先堂（東園は東園基敬なり）

上方御勤被爲成候方人心之居合必可然現場之處被相察申候間申上置候事

一　此度府縣之御規則役員名等までも御一定に相成大小によりて役員多少は可有之候得共各府縣役員役名給料等も各々區々にては甚不宜終に御一決之御目的は相立不申候何卒六等官以下之給料は可成丈け相增し五等已上は御減しにゟ可然判府事などの給は不都合に多きに過き實に辨事なとゝ安苦勞逸いかはかりと違に御坐候哉御精詮被爲在度左候ゟ格別實行之有之苦勞いたし候節不時に頂戴被仰付候得は隨ゟ諸事も行とゞき別ゟ取締等も相立可申と奉存候　大政一新億兆

皇化を蒙り候其實行之相擧り候處は府縣にゟ御坐候處如此各々區々にては眞以御實跡御六つケ敷奉存候事

一　參與副知事之混雜も是非々々御改正被爲在度奉存候事

右不憚忌諱言上仕候御高按之上可然御取捨奉願上候恐惶々々頓首百拜

（此書は月日及ひ宛名署名共に缺くも明治二年四月十七日木戸孝允が岩倉具視に致せるものなり）

五五　大久保利通宛書翰

明治二年四月十七日

（吉井は吉井友實）

謹啓先以
御壯榮に被爲居奉大賀候さては昨日吉井君より相寛候得は明日頃御出立被爲成候歟之御樣子拜趨仕候ゟ御内話申上尙御高慮も寛嘗度奉存候得共卽今困却仕居候間其内不取敢左に廉書を以申上候間毫も無御腹臟御示敎吳々奉願上候少々氣分折合申候得は今晩明早曉之間鳥渡奉寛度存候亂筆御了簡奉願候

一　今日之患害邪蘇御處致と金論と浪士之始末三條に御坐候處此度公平至當之處を以
朝議御一決に至り候上は後來之御規律確乎被相立自然相背候ものは斷ゟ嚴重に御處致不被爲在ゟは天下之事は公平たの寛太たの御仁恤たのと申事にゟ大瓦解に至り候は不待言事と煩察仕候御規律之確乎相立候は何分にも政府兩三方之御締り而已にゟだれ之說たのかれの論たのと申義一切無之總ゟ大條理之在る處を以斷然被仰出今日之
朝廷は只烏合之衆にゟ相立居其根居兎角難相据一二之世論に搖され隨ゟ世上大に狐疑仕候樣成行終に百事凝滯仕候政府之御締り方相立候上は諸官も必々區々と不相成氣脈貫通仕候事歟と奉存候

一　版籍返上之義いつれ於東京も得と御高慮を相寛度今日之姿却ゟ聞候人には虛心より大に感憤仕候ものも有之候歟にゟ言候人之内には氣脈潛感不仕樣之次第にゟ必竟爲
皇國煩念痛歎此事に御坐候元來癸丑甲寅就中戊午壬戌己巳來國家之難に相斃れ候ものも擧ゟ不可數然るに今日之事百世に涉り御維持之目的無御坐ゟは何事も五十步百步にゟ兒戲に落入申候弟等實に赧顏愧死之事而已に
ゟ兎角申上候も實に々々大恐縮仕候得共必竟
皇國内之事に付今日之事何分にも非は非是は是にゟ相盡し只管其當に至

り候處を奉祈念候事に御坐候間其思食を以十分に乍此上御敎諭尙御料理
奉願上候
皇國御維持之目的不相立百世之後に不相期事に御坐候へは大政一新は一
時之戯にゟ有害候とも益は決ゟ無之事と奉存候吳々も御敎諭を奉願度何
卒御含置可被成遣候
一　金札之義に付當春來人心之沸騰不容易諸藩之處も不心切なる次第に
ゟ少々於政府失處致候事有之候にもせよ
大政一新を被爲遊候
皇國之朝廷之御迷惑と申候ものゝ不容易候處朝鮮か支那歟之事之樣相考
へ如此全身中不隨處而已にゟはとても起立は無覺束且又雁金一條に付舊
幕已來讒謟面諛之徒只一己之利を而已相はかり
朝廷は不及申御國之妨害を相釀し候事擧ゟ不可言然るに薄々陰けより傳
承仕候へは己の非惡を掩はんか爲に今日之非を

尊藩へ而已申なし種々之姦計を廻らし候歟之由實に切齒之次第にゟ於弟
も憤懣に堪へ不申候然る處後世より相窺候ときは黑白迷亂難計事に御坐
候間姦徒之膽を落し候樣一御處致被爲在候ゟは如何哉と乍恐於病床愚案
仕候間不取敢申上試申候
尊藩之積年來御上下不容易
御盡誠にゟ今日
朝廷も春秋と相成誰歟其譯を蒙らさらん然るに陰事とは申計にもせよ右
諂諛之徒今日に至り種々之姦策を企候は於弟もいかにも遺憾至極に御坐
候是非御一策を被爲施度奉存上候勿卒申上候段萬御海容奉願上候
一　粗傳承仕候へは於東京副知官事參與中より段々被差出候歟之由甚歎
息仕候不得止懸り等被仰付候は無是非事に御坐候へ共參與中より知官等
出仕仕候と自然と一之小太政官をなし當人は至急之公議有之候とも多く
は當局々々專らにいたし參與之參與たる處も不相立而已ならす隨ゟ諸官

諸局却ゟ一派ニ見識を張り氣脈不相通氣味不少自ら政府御根軸も難相立一端と相成候間此義は已來被廢度事と奉存候

右は千萬乍匆卒申上置度奉捧呈候病中執筆大亂雜ニ段御高恕を玉はり御推覽奉願候其中時下御自玉爲　天下千禱萬祈ニ至に奉存候匆々頓首九拜

四月十七日

尙々一兩日は快方に赴き候心地仕候間不日東下可仕候間自然御無沙汰申上候へは於東京拜青可申上候昨今ニ工合にゟは大分こゝろよく覺へ申候拜

甲東老盟台御獨拆　　松菊生

（甲東は大久保利通）

五六　岩倉具視宛書翰

明治二年四月十九日

大亂筆

御推覽奉仰候御書き付類は東京へ早急相送り可申候間左樣被思召可被玉候此書

御一覽ニ上は必御火中奉願上候敬白

奉謹啓候今日は

御發輿ニ折柄長座御妨申上奉恐入候歸寓後も倩廉々細考仕候處誠以煩念而已にゟ實に苦心仕候依ゟ尙又左に言上仕候

一　版籍論薩より手を入るゝ云々實に今日ニ至急至密ニ肝要なる事許に ゟ片刻も迅速に此事大決定仕居不申ゟは千載一時ニ機會忽ちに相去り却ゟ名目も難相立姿と相成

皇國一般ニ氣脈は于此斷絶半身大不隨ニものと可相成此事極々至急至密に御手を被爲下度奉祈上候薩州國論一定ニ處を以訖度根を固め大一決にいたし置申候得は重疊に候得共無左ゟは前途ニ不成就不熟鏡に如照に奉存候吳々も機會を不被爲失候樣只々爲

皇國奉千禱萬祈候加州云々など尤懸念に絶へ不申別にも此向き可有之と

苦慮痛心此事に御座候萬世に關係仕候重大之事柄にゐ再ひ此時を得候と申事は萬々又萬々六つケ敷事と奉存候得と薩州へも御密話被爲在大體之處吳々も徹底仕候樣に奉願上候且又薩州へ他より相談不仕とも實にかゝる大切なる御時節にゐ

皇國御維持之當否に相かゝわり候事に付薩州よりも加州其外へ誠心懇切を以相說き肥前土州なども同樣にゐ可成丈諸藩一致に出候樣盡力有之度ものと奉存候なにも自分より至正至公にいたし見せ候ときは必長州と申事にかぎらす加州其外にゐも感動一致可仕萬世に涉り候事は實に此一條に大關係仕候間幾應にも々々乍此上機々密々を御洞察被爲游御盡誠奉仰候長州之事は薩州重臣一統相任し吳候樣に乍陰奉祈候內大久保と吉井は得と相呑込其內にゐも先吉井引受けにゐ不絕相盡し相說き速に一致一體之處に大一決仕居候樣偏に御料理奉願上候（吉井へ御委任被遊重々厚被仰聞周旋被仰付速急に一決仕候樣に吳々御指揮奉願上候）

一雁金論は今日粗申上奉り置候通之儀に付御都合を以何となく大久保（大久保利通吉井友實）へも爲前途大患たる所を御論談被爲在候はゝ同氏は至公至正之主意に付必御旨趣潛感可仕と奉存候天下實に雁金之事是儘にゐ彌相止むと申目的不相立ゐはたとへ於

朝廷いか程新金御改正有之候とも底拔けにゐ際限は無之萬民へは信更に不相立外國へは不正之名難被免而已ならず政府之基本不相立處を見透され行詰めは紛亂瓦解之外いたし方無御座得と大利害を大久保へも御論談可然と奉存上候實に又一大急務と奉存候

一外國之處此際切迫に相迫り候ゐは隨ゐ內外ともに何事も擧り不申丸々

皇國內今日まで之事を御打出し候ゐ實に去年一年は只兵馬匆卒之間に相過き歐羅巴などの大きに開けたる國とは幾千里相隔り人情も容易に難通事不少其上如此之違ひを急迫に西洋も同樣に諸事行とゞき候樣と申事は誠に六つケ敷事にゐ先暫此邊之事は不察吳ゐは困却之至りにゐ益內地之（於政府も從是手を被着候事に付今

取締も六つヶ敷邊之情態巨細に被仰聞邪蘇之處も於國律は是まで死刑之譯に御座候へ共寛典に被所可申乍去丸々國律を犯し候罪を一向不問とは却而國内之紛亂と相成交際之主意も不相立邊御打明けにも先英公使と申もの歟へ御相談被爲在候而は如何と奉存候乍然是は時機も可被爲在且大隈なども居合に付疎は有之間敷と奉存候へ共迅速に何と歟可然御一決には至り居不申而は益内は沸騰仕外國は迫り候樣に可相成終に其末はむやくやと相成可申候間迅々急々に御手を被爲着一御決着に至り候樣奉祈上候

（大隈重信）

（久留肥後之處御所致に肝心と奉存候）
（浮浪士之處も此後之御取締實に御大事にも實事不相擧ときは將來彌以御六つヶ敷奉存候

第一に　外國之事耶蘇御所致事

第二に　雁金と金札之事

第三に　浮浪御所致

已後諸規律嚴重相立事

多くは此三ヶ條にも與廢起扑は相定り可申と奉存候

一　名目一般之事は萬々最初に被仰出置候事可然と奉存候其節是迄之諸侯等も少しは御近昵等も被命度奉存候

（名和は名和毅）

一　攘夷（御主意書）云々名和之說も一理御坐候へ共後來之方向は被爲示候事に付いかゝ可然哉と奉存候

御高按之上可然奉願候

右言上仕度奉捧呈候御一覽後御火中奉願上候懸念之余乍再應言上仕候其中時下御自重爲

皇國千禱萬祈之至に奉存上候誠惶々々頓首百拜

四月十九日

再白功臣御賞論之事地下之處は格別不被急とも可然歟と奉存候御樣子次第一應之御沙汰丈けは被爲在候而可然歟に奉存上候付而は今日御噂

も被爲在候通一等二等三等と歟に御區別有之癸丑巳來も去年來も三四年來も一樣にゟは不的當にゟ必ゟ不可然歟と奉存候實に

御高諭に奉感服候

○昨年松平確堂（松平確堂は松平齊民）上京被仰付候處其間へ色々之周旋は入終に因循に至り爲其に舊年來勤王家之ものどもは一藩中にゟ大失望尊幕家之徒得志候

姿に相成可憐情實も不少趣連々承知仕此際誠に不面白事と奉存候昨年三條卿より作州藩鞍懸寅二郎（鞍懸寅二郎は鞍懸吉寅）と申もの辨事出仕と歟被仰付候ゟ可然と

の御尋も被爲在候處此仁は大に可然歟と奉存候左候はゝ一藩之維持と

相成隨ゟ今日之　御主意貫通可仕歟と奉存候今日申上候覺悟にゟ一藩

之事にゟ申上落候間更に言上仕候東京へ早々被爲召候方可然樣存上候

敬白

允

御密拆奉願上候

（此書宛名を略せるも岩倉具視に致せるものなり）

五七　伊藤博文宛書翰

明治二年四月十九日

大亂筆御推讀左候ゟ必々御火中奉願候

彌御清適奉大賀候此度は岩卿御一同御東下と奉存候千萬乍御面倒此書面

岩卿之御手へ直に御上け被下御密披被爲在候樣御願可被下候奉賴候

○先日願置候鳥尾（鳥尾は鳥尾小彌太）へ御渡し之紀州改革書面類いゝが相成候哉と奉存候且

又耶蘇御處致之御都合之書面御認如何哉必々無御失念急に奉願候○大久（大久保利通）

保へ一書出し候約束仕置候處相調不申候に付早速東京へ可出候間必々程

克御斷被成置可被下候偏に奉願候○弟も病氣出來不出來は有之申候得共

氣もゝめ候故可成丈け速に東下仕度と奉存候頭痛暴發時々仕候に實に々

々困却仕候大久保へも程克御致意吳々奉願候長之事は何分にも薩より一

定之處を以速に一決いたし置不申ゟは百日之說法屁一つと被相察申候加

州其外長州と申合すと云論段々有之候由付ゐは誠意懇切を以薩土肥前などよりも加州其外を説諭し可成丈け一致に出候樣仕度今日まで少々不信とも自身より至正至公ゑ實行を盡し薩土肥などにても加州始へ及説諭候ときは必感動可仕長ゑ如此加州始より被信候には赧顔至にゐ萬世に渉り候ゐ御大事場合に付苦心此事に御座候乍去必々冥々に御盡誠第一と奉存候○コスタリカ、ニユーヨルク等ゑ兵庫へ來舶ゑ頃合田中兄其外よりにゐも一應弟に通しもらひ度乘船ゑ折は暫時御厄害に相成申へく候間御留守へも可然御傳意奉願候田中兄始へもよろしく奉願候先は爲其取急匆々頓首

（田中は田中不二麿）

（井上善心は井上新一郎）

四月十九日一字

尚々於東京自然井上善心ともへ御出逢に候はゝ宅ゑ仕構へ御賴置可被下候奉願候薩を以速に一定仕置候處精々冥々に御盡誠第一に奉存候以上

（芳梅は伊藤博文）

芳梅盟兄　至密急

干

五八　大久保利通宛書翰

明治二年四月廿四日

拜啓先以

御清榮に御東着被爲成奉恐賀候御發途ゑ節は態と御立寄被成下奉萬謝候其節被仰聞置候　御沙汰書草案及遷延甚奉恐入候卽此度差出申候間尙得と御高案ゑ上十分御添削可然樣奉願候爾後西京も相變り候事無御座只差向懸念仕候は金札一條にゐ內實昨今ゑ處百八九十兩位ゑ取引にも相成居候由にゐ實に人民ゑ生活を托し政府ゑ信證と相成候もの如此日に時に相變り候ゐは誠に小民は一日も難相立趣にゐ此儘に御捨置有之候ゐは必沸騰は目前ゑ事と被相察煩念至極に御坐候何分にも迅速御一定東京においても御施行方相運ひ諸藩も御約束通りに拜借仕候ものは各國內へも相行ひ上納もの等も總ゐ引受け不申ゐは京攝其外近畿近邊ゑものとも而已患

害を受け實に
王政と申候ゟも名而已にゟ如此諸藩へも
命令不被相行海外へ
御威光を被爲輝なとゝ申事は不思寄事と浩歎仕候浪華等も米穀余程騰起
ゟ樣子小民ともは尤困窮相迫り候樣承知仕候其元因を探索仕見候得は諸
藩より浪華廻船ゟ米穀等盡現金に無之ゟは不相拂由にゟ自然と不得止騰
起仕候急々せめて議定諸侯方なとなりとも被仰合
朝廷ゟ　御沙汰に被爲基金札等ゟ事よりして
朝命遵奉ゟ實行被顯天下ゟ諸侯を急々糺正被爲在候はゝ金札なりとも如
此ゟ弊害は有之間敷歟と奉存候何分にも急速此義は御評決御實行相擧り
不申ゟは不安事と奉存候何ゟ處歟一村沸騰仕候と近畿忽波及紛擾可仕候
得と御評議を被爲盡度奉祈念候○名目一般ゟ事岩卿へ申上置候間可然御
評論奉願候先は右申上度取急匆々頓首九拜

四月廿四日

尙々病臥中執筆甚亂雜御推覽奉願候御別れ申候後腦痛暴發仕大困却種
々療養相加へ今日なとは余程快明日當りは行歩を試み可申と奉存候格
別相障り不申候得は近日より下坂ボートインへ參察を乞ひ其上早々東
下可仕と奉存候乍憚御放慮奉願候敬白

干令狂夫

甲東老盟台御内拆

（甲東は大久保利通）

五九　齋藤篤信齋宛書翰　明治二年四月廿六日

拜啓彌
御多吉奉大賀候偖先日は御來杖難有奉謝候毎々失敬而已申上候萬奉恐縮
候且先頃御嘶有之候媒を以製し候齒の藥余程奇妙に齒病を癒候趣就ゟは
同藩鈴木次郎左衞門と申者年來齒病にゟ大に難澁仕居是非小島俊貞子に
相賴度志願御座候然處住所彼是不案内ゟ事に御座候間至極乍御面倒御添

書被成遣候樣奉願度左候得は今日直に小島氏ゟ罷越候心得に御座候實に
毎々氣隨ゝ儀のみ申出千々奉恐入候先は爲其匆々頓首拜

四月念六

尙々御面倒ゝ儀申出萬奉恐入候拜

東洋先生　　允拜

（東洋は齋藤篤信參）

六〇　岩倉具視に贈れる書翰

明治二年四月廿九日

第一　御直覽

謹啓過る廿三日ゝ御書奉拜誦候先以　御機嫌克御着舶恐賀至極に奉存候
一　横濱表外國人混雜一條も先無事に相濟如元ゝ都合に至り候御樣子誠
に重疊と奉存候乍去御國內ゝ情實を愚考仕候ゟは又候無間何歟少々ゝ混
雜は出來可仕然るときは此度ゝ混雜無事に相濟候とも其節ゝ一ヶ條ゝ申
分には相成申候間實に此度無事に相濟候と申處に上下少しも無御安堵萬

事ゝ御取締訖度相立被置且又後來邪蘇御所致等ゝ事等も可成丈け此隙に
迅急御手を被爲下度御事と奉存候左候ゟ粗言上も仕置候通御國內ゝ事も
諸事外國人ゝ極込ゝ通りには實に相運ひ兼昨年も一年丸に兵馬ゝ間に相
過候樣なる御次第に付眞以不得止ゝ御行かゝり等よりして前途
皇國日進ゝ次第等打明け外國人へ此間に得と誠實を以御申聞被爲成置候
ゟは如何やと奉存候今日ゝ處にゟは彼等ゝ眼を以見候ときは
皇國ゝ事諸事十歲か十一二歲位ゝ小兒ゝ所作位ゝものにゟ是をして成長
人同樣に急に切迫に相迫り候とて實以六つヶ敷次第にゟ一旦交際ゝ御條
約も有之候上は彼も其情實は相察し候ゟ引立候了簡にて國內人心ゝ打合
方等も助け呉不申ゟは懇親ゝ所詮も無之事に御坐候間只今ゝ內篤と十分
に御應接被爲相成置度御事と奉存上候

但耶蘇ゝ事も精々迅急に何と歟後來に涉り候ゟ一御決定相立不申ゟは
日々に何事も御難澁に相成申へくと奉存候

（大久保利通吉井友實）

一　再度言上仕置候返上論に付大久保云々吉井云々左候ゟ薩より十一分に手を立速に一決定被致し置候手段之義元より御疎は不被爲在御事と奉存候得共吳々も迅々急々に無御坐候ゟは實に大事去矣と奉存尤煩念仕候乍恐機宜無御逆御駈引御指揮奉願上候先日上策云々申上候通別紙之如く今一應

朝廷より被仰出候ゟ諸侯より尙又重ゟ建言仕然る上にゟ斷然御採用之御運に被爲至候ゟは如何哉と奉存候左候得ば至極穩にゟ

朝廷之御主意も益徹下可仕と奉存候然し薩より手を下し一決定に相運置候方之都合は何分にも急迫と奉存候

但一決定に至り候には先書に言上仕候通因州などよりして是非々々一決定之儀を定め加州始速に方向を相立置

朝廷よりの應　御沙汰早々同意同論を以建言仕候樣冥々に御指揮は必無之ゟは不相濟と奉存候沖探三などは是非々々内密御任し候ゟ御使ひ

（沖探三は沖守固）

被爲成之御都合吳々も可然と奉存候他藩より實行之處は四藩を責め立候位に無之ゟは必先々之處不運と奉存候不運は則千載一時之機會を誤り候事にて御坐候薩之處吉井之處吳々も迅速に奉願上候

一　京都之處も段々探索仕見候得は必竟僧徒尤本願寺神祇官之不所致暴に廢佛を唱候より大に害と相成申候平田黨浪士などの不平連相合し候ゟ患害を釀し候事不少訖度御手を不被爲着ゟは往々必

皇國は下より大破壞になり候事と煩念之至に奉存候今日之姿にては浪士は一日は一日より澤山に相成申候古松澍二の事先日卒爾言上仕尙再應詮儀仕候處未上京不仕直に東京へ罷越候用意之確報承知仕候

於刑法官吉井源馬大に盡力仕候此仁は可賴ものと被相察申候

（吉井源馬は吉井正澄）

先は右不取敢言上仕度奉捧呈候先便言上仕候件々は速に御採用奉願上候實に金札雁金之御決定且副知官事等之事は差向大害不及申上何分にも御改正不被爲在ゟは御大事と奉存上候誠恐々々頓首百拜

四月廿九日

（此書宛名署名を欠くも木戸孝允が山本復一に贈りて岩倉具視に致せるものなり）

六一　伊藤博文宛書翰　明治二年五月六日

（後藤象二郎大久保利通）

版籍論少しも切迫後藤大久等へも御論し十に四部は昨日之論に候へ共未六つヶ敷處有之迅速を貴ひ申候以上

取急得御意申候さては齋藤篤信齋老人には御座候得共毫氣實に少壯之もの不所及昨年來鑛石之事夜白勉强弟も歸京後奥州にゐ爲調候等之鑛石も彼へ托し佛人に爲相調逐々相試候處但州鑛山御開き一條に付候ゐは屹度御約に相立決ゐ疑ひ無之故に往々御開き立之事に付候ゐも弟も少く分課之引受と歟申事に付是迄之心得を以申開け置候處明日辨事へ呼出候由自然被免候事どもにゐは於弟も甚失望千萬に御座候現場御たゞしにても彼鑛山之事に付候ゐは私は毫も不爲夜白盡力仕候事は相分り可申鳥渡承知仕候故いかゝ之譯歟と奉存御尋仕候何分之義御聞せ可被下候自然も被免候譯に御座候はゞ必御差とめに相成候樣御論じ可被下候鑛山丈け之御役には必相立申候委細は拜青可申上候匆々頓首

五月六日晩

尙々乍御面倒御答奉願候以上

（芳梅は伊藤博文）

芳梅盟兄御直拆　　允

六二　岩倉具視に贈れる書翰　明治二年五月七日

第二　御直覽

先便言上仕候通金札雁金の弊害日々に增長仕何分にも此儘にては前途懸念至極に奉存候浪華の商估共も上下とも只々日々金札等之高下而已を相窺ひ各其職を骨折候ものは更に無之此儘にゐは浪華も日々に衰微已に過日は粗一揆樣之事出來漸くにして且々鎭靜仕此後再發も實に難計京都も

陰微に其崩し有之誠に以不安事にて自然一發いたし候上は一時必四方に忽波及と被相察申候終に其基く處は金札と雁札とよりして人々内々各疑惑を抱き加るに此間に外國人には隨ゐ被致候事不少歎息無限次第と奉存候差向き金札は現金同様に復し不申ゐは不相濟付ゐは先便にも申上候通議定諸侯を始として速に各國中に施行行屆き不申ゐは不相成然る上は諸國が一々條理を以御責め有之早々施行之都合不相運ゐは京攝は元より是迄施行仕來り候處一日々々と患害相増し人民益相迫り候譯に御坐候何分にも此御所致急々務と奉存候彼三原屋喜左衞門と申もの一説有之至當之樣愚考仕候得ども準一是等之義に甚迂遠にて容易に同意仕かたく依ゐ段々功者仁に爲出逢討論仕らせ且又井上聞多も上京仕候故同人とも得と爲相論一理有之候樣相考申候間尙此上得と遂吟味彌可然事に御坐候はゝ中御門卿に言上仕候ゐ救助之一策相立可申左候はゝ浪華の一救助と相成可申と奉存候乍去何分にも金札論之處は精々速に現金同樣に相復候樣御所

（中御門は中御門經之）

致不被爲在ゐは不相成と奉存候隨ゐ雁金論も訖度御停止之目的相立人心安堵に至り候樣御評決不被爲在ゐは此一事にても　大政御一新は瓦解と奉存候事

御留守中會計官に骨子一人も無之候は誠に危き事と奉存候

引繼き浮浪之事も精々探索仕候得ども此儘にゐ被差置於□お根本速に御所致之御評決不被爲在ゐは其害益増長仕候昨春來度々御沙汰被爲在候得とも彌人數は相益し候譯に御坐候間訖度規律相立不申ゐは無詮事と奉存候吳々も規律の相立候と不相立とにて將來之成否に關係仕候事

雁金之事にて種々隱微に議論相立居誠に以可憂事不少中々筆頭に難盡奉存候間重ゐ取調言上可仕候事

準一不快今以はかはか敷無御坐不圖遷延仕奉恐入候何分にも一兩日より押ゐ下坂仕りボートインに診察を乞ひ候上引留相決可申と奉存候精々勉勵仕候ゐ於東京臥床仕候とも一應は速に相下り度奉存候乍去先便奉願

上候内情は乍恐　御含置玉わり候樣偏に奉願上候事

（此書月日及び宛名署名を缺くも明治二年五月七日木戸孝允が山本復一に賜りて岩倉具視に致せるものなり）

六三　槇村正直宛書翰　明治二年五月八日

亂筆御推覽是願候

此頃粗御内話申置候小原與之助一條も屢々不說承知いたし大に京都府全體之事に相かゝわり甚以不面白是等之事は斷然御免に相成候方上下之爲め可然と愚考仕候左候ゝは御免に相成候ものは國元へ罷歸り候樣に仰付度無左ゝは兎角小人輩は御國の爲などゝ申事は度外故己之不平より政府之妨害をなし候事不少尙今一應御聞合せ被成候ゝ内密宇田栗園翁へ御談合中御門卿へ被仰上候ゝ是等之事は御所致被爲在候方却ゝ御留守之御締り方相立可申と奉存候○杉山より金拜借いたし候分は百金之内にゝ御差引被成何卒兄之御迷惑に不相成樣公然御計らひ可被下候此事なども御談し

（中御門經之）

致し置可申と存失念仕候本願寺其外へ手を入置候にはいつれ入用は相かゝり候事に付無益之入費は元より厭ひ不申ゝは不相成候得共入用丈けは相渡し不申ゝは所詮何も行屆き不申候吉井へも申遣し置候間得と御談合可被成候○今日之形勢過刻も御内話申候通始終他願之念而已にゝ政府には少しも權力は無之其故

朝廷々々と申候も只口計りゝ聊も御威稜之相立候處は被寛不申此上は政府も昏睡に至り候外は致し方無之何分にも今日之急務は御内話仕候件々之第二三ヶ條は相擧り不申ゝは何事も下より壓倒され申候得と乍此上御熟議を被盡於京都速に實事相擧り世間之鳴りを御靜め有之度奉祈念候付ゝは東京之御布令に基き御取締之廿一條も急速京攝へは御布令相成候義實以可然と奉存候先は取急乍亂筆奉呈候其中時下御自玉爲邦家第一に奉存候匆々頓首

五月八日

（吉井は吉井友實カ）

尚々留守中は乍御面倒可然御氣を被付被下候樣奉賴候以上

木

槇　老　兄御直披

（槇は槇村正直）

六四　大久保利通宛書翰　明治二年五月八日

拜啓

益御安康被遊御勤奉恭賀候陳は微恙御尋問として不存寄結構之御品御惠投被成下御厚情萬々深奉感荷候拜眉之節御禮縷可申上奉存候先一應之御答迄早々恐々

五月八日晴

孝　允拜

大久保老臺下

（大久保利通）

再啓病中故乍失敬代筆を以申上候以上

六五　井上馨宛書翰　明治二年五月九日

昨日は態々山莊へ御來光奉多謝候其節久保氏東行之儀尚相窺置可申と奉存失念仕候に付此段不取敢申上試候新金其外此節之機會にゆ大に得失に關渉いたし候事に御座候得は無余儀譯に御座候へ共實は如御承知此頃一時諸老功も拔足在應之諸有司も茫然たる姿にゆ結締之氣脈も如何可有之歟と聊煩念仕候自然則今に不相限事に御座候へは當秋より久保氏も東上之都合に相成候はゝ旁可然歟と奉存候此間までは左程之事とも存不申候間久保氏は來早春東上位之積りにゆ御座候處右之譯に相成候はゝ皆々ぎゆつと可仕歟と相考へ申候依ゆ此趣御相談旁申上候御一答奉願候先は爲其草々頓首

五月九日

（久保は久保斷三）

尚々今日參り候樣に先日御噂御座候處彌今日に御座候哉鳥渡御尋申上候以上

世　外　老　兄御直拆

（世外は井上馨）

錢　面

六六　大久保利通宛書翰　明治二年五月十三日

病中執筆殊に大紛亂御推覽奉仰候拜

拜啓先以

御壯榮に御忠勤大賀至極に奉存候御發途之節は御多事之央態と御立寄被成下奉萬謝候小弟も其後しか〳〵無御坐候得とも推而下坂仕ボートインに乞疹察申候處中々一朝一夕之事に無之容易に全快は六つヶ敷漸を以療養仕候樣申聞け候得共　御沙汰も相蒙り居且岩卿方にも御約束申上置余り遷延に至り奉恐縮候間兎に角一先東下仕然る上にゝ相窺可申と奉存不日乘艦可仕と奉存候此段御降察を玉はり乍恐可然御計らひ奉願上候爾後京地も都合相變り候事は無御坐候得共浮浪之徒益々跋扈種々流言を以大に人心を煽動仕屢集會々議等をなし何歟姦謀を相企候由に付段々手段を盡し軍務官にゝ河田佐久馬（少々推し足り不申）刑法官にゝ吉井源馬（此人頻に盡力仕候然るに只海江田君而已）（河田佐久馬は河田景與）（吉井源馬は吉井正澄）（海江田は海江田信義）

村半九郎と申ものへ得と相謀逐々詮義仕候處不被差置證跡も有之候由にゝ此度相捕へ申候必竟御寛大々々にゝ此委に立至り患害日に增長仕候形勢に付訖度於于此は御手を被爲下御取締有之度然るに大原卿なと之議定にゝ先日も一統他願を生し甚困窮仕候乍去とふ歟一御締りは無御坐ゝは益紛亂狐疑仕候間不得止得と相論し置申候別帋は差□（出カ）候まゝ備尊覽申候僧徒之事は岩卿へ申上置候別帋にゝも必々他へ御示しは御用捨奉願候岩卿へは廉々御口話可被成遣候肥後は國元にはまた別に一論有之是非とも御國なとゝ御同力にゝ盡力仕度由にゝ米田なと當時御國へ罷越居候由東西兩京へ出浮居候ものは頻に浮浪を煽動し東本願寺始僧徒を惑わし殊に本願寺なとは御國之名を張り迷亂いたさせ候等之事も有之候由總ゝ不平之徒一塊をなし隱密之間に防害を成候事不少訖度御嚴正に御取締無之ゝは四方へ蔓延仕此弊害又難拔と煩念仕候高野山之僧徒も如別帋檄を出し

（横村半九郎は横村正直）

（米田は米田虎雄なり）

□は脫字

（にゝ別に相談相手も無之諸官とも官中より浮浪へ通し候處不少實に困り入候次第にゝ訖度御礎相立不申ゝは隨ゝ瓦解に御座候）

候一體旨趣は相聞へ候得共始ゟ二三條人心に相障り候事不少總ゟ如此も
の差出候へは一應相寛候上にゟ相計らひ可申ゟ處不都合至極に御坐候京
都へは申通し置申候浪華にも本願寺天王寺なとへ頻に集會候由にゟ大に
人心に相響き申候先は任幸便奉捧呈候其中時下御自玉爲
邦家肝要ゟ御事に奉存候匆々頓首九拜

五月十三日　　鐵面生

甲東老臺御密拆御獨覽　御投火

（甲東は大久保利通）

六七　大村益次郎宛書翰　明治二年五月十三日

病中相認尤大亂筆御推覽被下然る後必御投火奉願候以上
朶雲相達奉拜誦候彌御壯榮に引續き御高配奉遙察候御地も腹心病快癒御
手段御帋上ゟ趣にゟも尚想像仕候邊にゟも大困難と懸念至極に奉存候弟
も何歟と煩念に御坐候得ども三月來不快にゟ當節ホートインに相かゝり
彼も一朝一夕ゟ事に無之候間引しめ保養不仕ゟは必不可然と申聞候乍去
一應東下ゟ事も御約束申上置候に付遷延仕候ゟは不相濟と奉存兎に角一
先近日より東下仕一御始抹ゟ上間地を奉願度奉存候昨年より逐々歎願仕
一日々々と今日に至り却ゟ空敷消日仕只管恐縮ゟ至に奉存候乍恐何分に
も朝廷ゟ事は幕府へ會津が盡せし如く眞ゟ
勤王諸侯兩三輩無御坐ゟは右往左往と名目に相騷き候内に國も家も捨候
樣に成行候は目前ゟ樣相心得實に又積年ゟ次第を以眞實に御國の事など
も世上憂國ゟものどもよりも涕泣して被相尋此日ゟ處にゟは弟などにて
は必死ゟ御盡力と申候もの歟何と申候もの歟難相分勢を察し候に是又容
易に無之余程銕面に遣りかけ見候得共浩然ゟ氣鋭果他藩へゟ存寄も自然
と出來兼申候意味筆頭に難申上盡奉存候於
朝廷も基本となりて忠勤仕候諸侯相とゝのひ候上はナパレヲン論にゟ一
先は威力を以御威稜ゟ相立候樣ゟ御奉公ぶりは無之もの歟と奉存候攘夷

論と歟何論と歟必竟己ニ不平より種々ニ妨害をなし東西人心を紛亂させ候事も不容易然るに諸侯も多くは一寸ニ功勞有之候得は一尺ニ自慢而已にゐ天下に只顔を賣り候事而已相勤全國ニ危急は一向相分り不申自然造物者に此先別に趣向有之今日ニ形勢も其前證にゐ却ゐ如此譯ども候へはよろしく御坐候得共無左ゐは中々一臂にゐ維持ニ目的難相立種々樣々工夫を廻らし見候得共未定筭無御坐只々煩悶苦慮仕候不日尙拜青御高按相窺可申候

一　堀眞五郎書面中各官全權と申儀一向相分り不申六等官已下知事副知事ニゐも御坐候哉弟も此邊ニ儀一向承知不仕元來參與より副知事に相成候にも隨分弊害不少樣相覺申候兎角有名無實に落申候六等官已下は局々にゐ勝手進退致し候と申も余り歟と被相考候尙御高按ニ儀も被爲在候はゝ岩卿へにゐも被　仰込置可被下候（眞吾ニ書面は岩卿へ幸便有之候故差送り申候）（堀眞五郎は堀義彥）

一　佛脫人生禽一條眞吾ニ說ニ如く大に又不知ものは議論を起し疑惑を生じ可申兎角如此事終に一塊物と相成妨と相成候事不少先生御說ニ如く交際上にゐニ御規則有之候はゝ其處に被爲基御所致相成候處ニ條理御示し有之候ゐは如何左候はゝ世間にもまた安堵可仕元より御疎不被爲在事と奉存候得共始終意外ニ事にゐ今日ニ妨害と相成居候事多くに付不取敢申上候相窺度事海岳に御坐候得共筆頭難盡拜青ニ期と申縮候其中時下御自玉　邦家ニ爲第一と奉存候匆々頓首奉復

五月十三日晚

尙々內藤も昨日下坂過刻乘船仕候京都も無賴ニ徒橫行或は又種々ニ說を以大に人心を煽動姦謀を企候邊ニ事も有之逐々探索此節段々手を下し取締り有之申候以上

末　老　臺奉復御密拆

糸米鋏面

（內藤は內藤左兵衛）

（末は大村益次郎）

六八　槇村正直宛書翰

明治二年五月十四日

大亂筆御推讀是願候

朶雲相達披見仕候彌御壯榮に引續き御盡誠大賀此事に御座候

一　此度之捕縛に付候ゟは實に不一形御盡力如貴諭必竟春來より之御所致判然不致所より如此體勢に成行何とも痛歎之至に御坐候御所致之上は何卒是非正邪判然と世人も承知仕候樣御示し無之ゟは不宜此條申も乍迂遠精々御含置可被下候

一　浪華之件々い曲承知今日西本へも面會候に付い細に相談じ置申候明日より一應上京之由に付尙十分に御談合可然と奉存候（西本は西本正道）

其節新聞局之事も得と御談合有之度弟此ヶ條致失念候實に諸民無根之說を唱へ名々疑惑いたし候には込り申候疑多きときは民心騷く騷ゟ不止とき天下紛亂何分にも可疑こと有之候ときは直々申出判然と御主意を承知いたし疑惑を氷解させ候樣いたし度新聞局と申候は其尋て申出候場處にゟ西洋新聞局之心得とは大に相違仕候

藝州雁金益盛爲其下筋大に人心も動き且又

朝廷之御重役より如此こと遊し候故金札も元より引當に不相成と申頻りに騷々敷由今日西本へ可相談と存同及失念申候折を以御噺置可被下候都合次第に藝侯へ直々被仰入候ゟも可然是等之事誠を以仕候ときは決ゟ有益ゟ無害必一々侯にも御存無之事可多と被存申候

一　高野僧之檄文も最初之二三條甚人心に相係り申候大に暗に

朝廷之御政事を誹謗いたし居候樣に相響き申候何

朝廷外夷之說を迷ひ釋氏を斷絕可被游哉如此事は甚不宜そつと森寛齋へ御談じにて趣主御尋被成候歟又は辨事社寺之かゝりより高野之僧徒を被呼出御尋有之候と申もの歟已來は如此ものは一應伺候上にゟ布告致し候樣被仰付ものと存申候御高按之上可然御計らひ可被下候

一　京都府役人進退實に如貴諭證跡無之事にゟ猥りに退け候等之決ゟ不

宜又如此奬出來候ゟは眞に一身を擲ち候ゟ御爲を計り候もの無之且又今日之處にては先一始抹に至り候までは役人を成丈け不退樣いたし度津田と歟申仁なるも引込候はゝ何卒相應之人一名御都合次第早々被差出候樣御申込可被成候此機會に速に御手を被下度事と存申候岩下へも一書出し候間御屆け可被下候

（岩下は岩下方平）

小原之說は段々有之彼藩にゟも正義之連は甚嫌らひ內外とも說多く小原之爲に別之正義人まで疑惑を生じ候樣之氣味不少近來大に京都府へ此一人にゟ關係候由承知いたし候乍去此際之事に付差向大害無御座候はゝ時機を以可然御所致有之度弟は元此人を得と不知只世上讒說而已ならず有之候故聊懸念いたし候

（小原は小原是水）

一　小學校論尙得と御相談いたし置可申と相考失念いたし候い曲木梨へ相談置可申候間御聞取可被下候何分にも論語一冊をかゝへ五六年も不知何事只なま聞に相成候樣之もの而已出來候ゟは却ゟ國之大害故此御規律

（木梨は木梨信一）

申も乍疎第一と奉存候

一　東京之浪士取締之御沙汰に基き一應御布令有之置度節々弟御談申候は他にあらず兎角京都在官人而已にゟは行詰候處に至り候と緩急種々之議論出大に他願之念を生し候に付先一着に東京之御沙汰に基き御留守中之儀に付別ゟ嚴重に取締被仰付候間不審之もの有之候はゝ可申出云々位之御布令相成居候はゝ在官他願之念を防き候一端と相考申候道理上之中にも又安堵爲致候ゟ働かせ候手段有之度歟と奉存候

一　肥後藩議論兩端にゟ攘夷家と俗論家と相合し大に人心を皷動する之徒則當時東西京に出浮居候ものにゟ彼福田秀一之類を相抱ひ置申候國論は又別にゟ右京大夫左京亮を重におし立薩長と合し朝廷へ盡し內輪之賊徒も押込んとする之策も有之候由長岡監物と申仁之子息にゟ米田寅之助と申家老は隨分人物にゟ曾ゟ大久保一藏ともとも相交り候事有之昨年來も重に彼一人之盡力にゟ御座候此度薩長と合する周

（右京大夫は細川護久）
（左京亮は長岡監物にて長岡護美）
（米田寅之助は米田國臣）

旋之爲薩に罷越居候由而しゐ長へも來る都合と云我今日之樣子にゐは甚歎息に不堪懸念至極也今明日之間に左京亮上京可被致參政道家元山副參政坂本彰兵衛會計局矢津敬之介等付添罷登申候是迄在京之徒之所致を甚憂ひ居申候福田秀一等之事も得と彼等に通知致し度横井なとの事も大に福田煽動いたし却ゐ肥後藩より俟之耻辱は不顧私怨を人之手にゐ報ひ候譯に御座候御都合次第誰歟右三士之處へ御遣し得と彼之情實御察知之上氣脈御通じ相成居候はゝ行々之御都合別ゐ可然と致愚考候今日大村よりも一符到來候處東京も懸念之事不少何分にも御取締半途に相成居候ゐは甚不宜候乍此上御盡力奉祈候

（横井は横井時存）

（大村は大村益次郎）

肥後之樣子は御都合次第岩下へも御通じ置可被下候

一　過日御内話有之候雁金之儀も何卒急々御詮儀被仰聞被下度大に一機會得候事も可有之歟と相考申候

（河谷は河谷縫殿）

一　河合始姦徒之姦計も相分り候上は公然と世上へ御示しにて人心を動搖いたし候等之證跡も訖度擧ゐ相罰度ものに御座候是迄所詮無根之說を唱へ世間之人心を煽動惑亂し政府之妨害をなし候事不少於于此彼徒之姦策を相穿ち聊にゐも人心之惑き候方に御所致有之度申も迂遠至極に御坐候得共乍序申上候先は御返事旁得御意申候其中時下別ゐ御自玉第一に奉存候匆々頓首

五月十四日

尙々何歟御用事も御坐候はゝ御申越可被下候不遠東下可致と存申候以上

牧　樣御密拆　　糸　米

（牧は槙村正直）

岩公へ之別帋御賴仕候

六九　岩倉具視に贈れる書翰　明治二年五月十四日

第三　御直覽

別紙浪華人民紛擾之事言上仕候處只今報知候處にては兩三日前よりの模
様にて西本清介等の盡力にて說諭之邊も少々相とゝき紛擾之萠聊相おさ
へ一安堵に御坐候得共前途之處は則席療治にては中々無覺束事にて決し
て　御安慮には至り兼申候間金札等よりして雁金論之御評決御大事と奉
存候精々迅急を奉祈候可被爲在　御懸慮と奉存只々兩三日之模樣丈け尙
更に言上仕候京攝之氣脈相通じ候事第一と奉存候に付重ゐ西本槇村に申
聞け無拔り精々周旋可仕候
箱館もどふ歟兵庫邊探索より報知之處にては四月十六日官軍大勝利にて
已に平定に至らんとする之勢未眞僞難相辨奉存候得共左も可有之歟と奉
存候箱館平定之上は速に判事不被差置ゐは難相濟候處容易に又御人撰有
之候とも實に御大事に付先長谷部卓爾に權判事被仰付候はゝ重疊と奉存
候同人は昨年來箱館に出張仕居大に評判もよろしく當時蝦夷地產物之取
締仕候別紙堀眞五郎よりも申越候間奉備

（西本清介は西本正道）
（槇村は槇村正直）
（長谷部卓爾は長谷部辰逸）
（堀眞五郎は堀基）

尊覽候敬白

（此書は月日及び宛名署名を缺くも明治二年五月十四日木戸孝允が山本復一に贈りて岩倉具視に致せるものなり）

七〇　早川洪藏宛書翰　明治二年五月十五日

亂筆御高恕十津川は判然御所致無御座候ゐは始終御府之御煩歟と奉存
候拜
拜啓先以
御清適に御壽誠奉大賀候さて過日御　上京之節はイ勢一同緩々拜話仕度
と奉存候處兎角御懸違にゐ殘懷至極に奉存候乍去東山之風光は稍御盡し
被爲成候乎と御浦山敷奉存候私も爾後所詮不快にゐ今以東下不得仕碌々
消光仕居申候于時頃日粗傳承仕候得は十津川何歟騷々敷樣子元より御疎
は不被爲在御事御座候共近來十津川人も段々浮浪士に應し種々無根之說
をとなへ大に世間を爲惑亂候評判も有之如何之形勢歟と奉存候頃日於京

（イ勢は伊勢氏華）

都も段々姦謀露顯捕縛せられ候徒も有之候由承知仕候十津川人も右へ荷擔不仕とも自然と世上に疑惑を生じ申候於京都は軍務官にゟ河田佐久馬刑法官にゟ吉井源馬京都府にゟ槇村半九郎等頻に申合せ盡力仕候由に御座候間萬一御所致方に付候ゟ御示談も御座候はゝ右之連中へ內密御謀り被爲成候御儀上策と奉存候近來中々諸官中も油斷不相成却ゟ浪士どもへ內より相洩らし候氣味も有之候由に御座候乍恐

（河田景與吉井正澄槇村正直）

朝廷之事如今日御基礎不相締ゟは實以浩歎之至に奉存候先は乍匆卒不取敢御內々奉捧呈候其中時下御自玉第一に奉存候匆々頓首九拜

五月十五日

尙々乍失敬大谷君へも可然御致意奉願候

十津川人は前木鏡之進森尾帶刀岸本庄兵衞植田三藏野崎佐吉野崎正東橿平兵部此七名舊來之俗論と申說有之申候承り候まゝ申上置候私も八日より下坂保養仕いづれ不日乘艦不仕ゟは相成間敷と奉存候其中御用御座候はゝ無御用捨被仰聞可被下候以上

（早川は早川洪藏）

早川先生御密拆　　允

七一　早川洪藏宛書翰

明治二年五月十九日

只今夜十二字にも有之候歟朶雲相達し奉拜見候彌以　御清榮奉大賀候十津川も實に御紙上之次第にては實に朝廷を蔑如仕候樣現然にゟ不埒至極と相考申候此鄕は舊來御由緒も有之候事に付格別之蒙御寵遇已に此度も列藩に先じ米穀等下玉わり候處却ゟ朝威を奉汚候等之所致不少此度御糺正も無之ゟは往々之爲め甚以不可然之事と奉存候古昔を相考候ときは此際別ゟ朝廷之御爲め粉骨盡力天下之標準とも可相成筈之處不容易御厄害を引起し報恩以讐之所致而已實に可惡之至に御坐候何卒吉井源馬河田佐久馬槇村半九郎等被仰合極密に御諭決被爲在度被存候私も廿三日頃には乘艦仕

候場合に至り可申歟と奉存候先は不取敢御答まて匆々頓首拜復

五月十九日夜

尙々十津川之一條は此度訖度判然たる御所致不被爲在ゐは永世御府之御厄害と奉存甚懸念仕候元より御疎は被爲在ざる儀に御坐候得共尙愚存之まゝ上紙仕候萬御容赦奉願候拜

孝允　拜復

洪藏先生

（早川洪藏）

七二　槇村正直宛書翰

明治二年五月二十日

（西本正道）

華帖相達拜見致し候彌以御清榮に引つゝき不一形御苦慮と想像仕候西本清介歸坂い曲直々承知仕逐々御締り方實行も相顯れ隨ゐ小民どもゝ安堵いたし誠に一段之事に御坐候尙此上御盡力只々致祈念候十津川も甚以不治兎角

朝廷を輕蔑いたし候所致不少丸々奈良府どもは度外に相扱ひ候由早川洪藏も大に怒り已に昨夜一書差越候次第に御座候此往之都合によりい細貴兄と吉井佐久間へ遂示談候樣內密申通じ置候間自然御相談致候節は御談合にゐ可然御計らひ只々奉謝候且又河合縫殿始之罪狀大略相分り居候はゝ廉書にゐもよろしく御示し被下候得は無此上彌弟も廿三日頃には乘艦に可相成と存居申候可相成事に御座候はゝ御賴仕候先は爲其取急得御意申候其中時下御自玉爲國家第一に奉存候頓首

（吉井は吉井正澄佐久間は河田佐久馬にて河田景與）

五月廿日夜

尙々河合始之罪狀も何卒世間へは公然と御示しに相成候樣いたし度兎角狐疑私怨之說を以大に素人を惑亂させ候氣味不少稍もすれは毫厘之事千里と相成理を以非に沈み候事有之人間遺憾に御座候間佛前之說法迂遠至極と奉存候得と贅言仕候以上

半九郎樣內密

準一郎

（半九郎は槇村正直）

七三　岩倉具視宛書翰　明治二年五月

別紙は堀眞五郎と申候もの箱館より差越申候間奉備
尊覽候本文之處得と不相分各官にゐ全權云々と申候は知事副知事之處に
ゐ六等官已下は勝手進退爲致候と申事どもにゐは無御坐歟と奉存候是に
は段々世間にゐも議論有之終には後來大に弊害可生と奉煩念候今日にゐ
すら各官は兎角我氣に不入ものは相拒み候ゐ頻に同類之ものを而已引込
候弊不少決ゐ大政官よりの御沙汰も何と歟ケと歟申候間終當人も出勤難
出來樣之弊有之申候如此度御都合に相成候ゐは益御根本と氣脈は不相通
樣成行可申と奉存候
佛脫人生禽、一條に付候ゐも又大に世上議論を起し種々之疑惑を生し候ゐ
は不宜兎角如此事一塊物をなし政府之妨害と相成候儀不少候間交際上之
御規則にゐ彼に御渡しに相成候御都合に御坐候得は其處之條理軍務官歟
外國官歟關係之處より得と世間に御示しに相成世間可成丈け安堵仕候樣
御所致有之度大村へは一應申遣し置候可然御取捨奉仰候事

（大村は大村益次郎）

準拜

（此書は月日宛名を缺くも明治二年五月木戸孝允が岩倉具視に致せるものなり）

七四　伊藤博文宛書翰　明治二年五月

鳥尾小彌太へ別に書狀出し不申候間よろしく御致意可被下候先達ゐ御噺
も有之候通只今之內實事に涉り候ゐ修業仕候方よろしく無左ゐは年を經
候內に終に何事も空論に屬し候樣相成候ゐは折角之人物可惜之至に付た
とへ紀州に居候ゐも實事を手取り候ゐいたし候樣御申聞且つは陸奥へも
此段御賴置可被下候奉賴候此一包みは手紙にゐは無之御序に御とゝけ奉
願候以上

（此書は月日及ひ宛名署名を缺くも明治二年五月木戸孝允が伊藤博文に贈りしものなり）

七五　槇村正直宛書翰

明治二年六月一日

亂筆高恕

彌御清榮に引續き御配慮遙察仕候弟も漸廿九日東着逐々近況承知いたし候處端々御手も相着どふ歟此節之光景に候得は少々つゝなりとも御目的相立候事歟と申位之事にゐ御座候一時は余程混雜最早瓦解之外無之と一統浩歎之由に候處聊取返し候勢に相移り申候乍去未中々毫厘も油斷は不相成候

一　人心を惑亂鼓動いたし四方へ種々之流言怪說を觸し大に御政事之大害を釀し候ものは實に浮浪輩にゐ毫厘之隙有之候得は忽相乘じ候ゐ樣々之姦計をなし不可進事而已にゐ御坐候今日は段々其患害たる事も堂上方始大分御分りに相成訖度手を不被下ゐは不相成と申事に一決いたし殊に軍務官も東京は一體にゐ是非々々盡力いたし詰候との決意に付何卒此好機會に東西響應十一分に御手を被爲着度事と奉存候間乍此上一時之機會を無御拔必至御盡力吳々に御素志貫徹之期は今日と奉存候間御實行相達候處千禱之至に御坐候逐々軍務始より承知仕候に兎角浮浪之本城は西京にゐ何事も西京にゐ割出し東京へ及候事不少候に付西京之御探索十分に行屆候事尤急務に付仕度御內々御通じ仕置吳候樣軍務よりも被托候に付精々此余之處尙御探索不殘樣御手を被着度東京於軍務は寸步も不除斷然着手之都合に一決無疑候只々西京之本城より及し候事不少に付浮浪之本城十分探索之儀切に申出有之候

一　十津川之事も軍務へ御任せにゐ此度は斷然訖度爲後來に御所致被爲在候都合にゐ已に今日兵隊出立直ちに十津鄕へ踏込十分に着手相成候都合に付逐々御聞及之事も可有之候間諸事拔りなき樣御氣を被就可被下候此所致之當否は大に世間始浮浪どもへも關係仕候事に付精々判然と有之度吳々も御助力是祈候

斷然過き候事は決ゑ不相厭事にゑ十津川郷も一統此一所致にゑ膽を冷し再御厄害不申出樣に丈け御手を被下度乍去自然も所致上にゑ判然と不致曖昧に落入り所作而已斷然にゑは必再疑惑を生じ又隨ゑ世間にも恐れ不申候間此處は吳々も御注意にゑ西京ゑ大勢を御にらみ不失當樣御盡力專一に奉存候事

罪狀は尤明白に御示し無之ゑは不相叶候事

先は右急々御報知申置度相呈申候其中時下別ゑ御自玉第一に奉存候匆々頓首

六月一日　　牧　雅　兄極密投火

（牧は槇村正直）

追　面

七六　伊藤博文宛書翰　明治二年六月六日

大亂筆御推讀可被下候

朶雲拜見仕候なるほと迂遠ゑ氣味は難免然し粉骨盡力は彼に中々少壯もの丶成就は無覺束歟と奉存候昨夜御手紙を拜見仕候故先今日參朝仕候事は爲見置申候處只今一字にも相成又候參朝仕候樣にと申候ゑもまごつき不都合千萬に付此余ゑ處丸々可然奉願候但馬鑛山ゑ事も諸賢元より御承知とは奉存候得共弟も逐に承り候事有之またこ丶にて御改革御一新は奉感服候得共ごたゞ〳〵まかせに相成候ゑはがく屋の騷動にて日は暮申候今一應御細思被爲在度奉存候齋藤は迂遠にゑ定約等ゑ不都合一向存不申候もとよりこ丶は難被免こと丶奉存候定約も必彼ゑ獨斷にゑは有之間敷第一鑛山ゑ一條に付候ゑは五代大將ども御差圖とも無之哉また元因も御調らへ有之度奉存候何分とも最前ゑ行かゝりに付今日は弟ゑ罪にてとゞめ置申候間始末可然丸々奉歎願候匆々頓首奉復

（齋藤は齋藤篤信齋）

（五代は五代友厚）

六月六日　　允